

稗田頭B遺跡

—平成5年度県営圃場整備事業榎木地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—

1994.3

茅野市教育委員会

稗田頭B遺跡

— 平成 5 年度県営圃場整備事業概木地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 —

1994. 3

茅野市教育委員会



耕田頭B遺跡

(西より)



第7号住居址土偶出土状況



第2号土坑石製裝身具出土状況

序 文

長野県の中央に位置する茅野市は古くから人びとが活躍した舞台であり、市内には300を越える遺跡が発見されています。その多くは縄文時代のものですが、なかでも中期と呼ばれる時期の遺跡が多く、大きく発展したことが知られています。ここに報告する稗田頭B遺跡はその中期の初頭に営まれた集落であります。この一時期に限られた集落の例は市内では数少ないものであり、この時期の縄文文化の研究を進める上で貴重な資料を得ることができました。また、集落が営まれる以前のものと考えられる陥し穴も見つかっています。

稗田頭B遺跡の調査は棚木地区の県営圃場整備事業に伴い、茅野市教育委員会が緊急発掘したものであります。近年の圃場整備事業の進展により、各所で多くの遺跡が発掘されるなか、棚木地区でもここ数年のうちに、上見遺跡、中原遺跡、稗田頭A遺跡、夕立遺跡、稗田頭C遺跡の調査が行われています。これらの調査によって、今までよく分からなかった遺跡の性格が判明し、郷土の歴史を解明するのに役立てられています。

悠久の彼方、我々の祖先は何を考え、どんな生活をしていたのでしょうか。調査の成果を、より具体的で正確なイメージを持つ手がかりとしていきたいと思います。

最後に、発掘調査及び遺物整理作業等、長期間にわたりご尽力いただきしました方々、地元の皆さんをはじめ関係者の方々に心より感謝いたします。

平成6年3月

茅野市教育委員会

教育長 両角昭二

例　　言

1. 本書は、長野県茅野市泉野下棚木稗田頭B遺跡の県営圃場整備事業に伴う、発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国庫及び県費の補助を受け、茅野市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、平成5年7月16日から12月20日まで実施し、出土品の整理及び報告書の作成は平成5年12月21日から平成5年3月22日まで茅野市文化財調査室において行った。
4. 発掘現場における発掘、記録及び遺物整理は下記の調査員、調査補助員、作業員が行った。
5. 本報告にかかる出土品、諸記録は茅野市文化財調査室で収蔵保管されている。
6. 本書の遺構実測図は住居址を1/60、土坑を1/40、集石を1/20の縮尺とした。
7. 平面図中のーで示した数値は検出面から最深部までの計測値を示している。単位はcmである。
8. 本書の原稿執筆は、調査員の小林健治と補助員の武居八千代が協議の上、共同しておこなった。

9. 調査の体制

本調査は茅野市教育委員会文化財調査室が実施した。組織は以下の通りである。

調査主体者 両角昭二（茅野市教育委員会教育長）

事務局 原 充（茅野市教育委員会教育次長）

　　永田光弘（茅野市教育委員会文化財調査室室長）

　　鵜飼幸雄（茅野市教育委員会文化財調査室文化財係長）

　　両角一夫（茅野市教育委員会文化財調査室主任）

　　大月三千代（茅野市教育委員会文化財調査室主事補）

調査担当 守矢昌文（茅野市教育委員会文化財調査室主任）

　　小林深志（茅野市教育委員会文化財調査室指導主事）

　　功刀 司（茅野市教育委員会文化財調査室主事）

　　小池岳史（茅野市教育委員会文化財調査室主事）

　　百瀬一郎（茅野市教育委員会文化財調査室主事）

　　小林健治（茅野市教育委員会文化財調査室主事） 現場担当

　　柳川英司（茅野市教育委員会文化財調査室主事）

調査補助員 赤堀彰子　伊藤千代美　牛山市弥　牛山徳博　占部美恵　小松とよみ

　　関 審子　武居八千代　原 敏江　堀内 澄　矢崎つな子　矢嶋恵美子

発掘調査・整理作業参加者

　　有賀あや　有賀博江　伊藤京子　今井寿恵子　今井ちよ　鵜飼澄雄

牛山和男	牛山秀子	牛山みつ江	遠藤桂子	太田友子	岡 和宣
金子清春	北原きよえ	木村桂子	木村早苗	木村忠行	久根種則
栗原昇	小池茂美	小平千恵子	小平ツギ	小平長茂	小平三行
小平ヤエ子	小平義市	志賀清美	鎌原リカ子	清水園恵	白旗スエ子
関 秀樹	武田けさ子	立木利治	立岩貴江子	田中慎太郎	田中洋次郎
東城生喜	富田 長	長田 真	花岡照友	馬場きん子	林靖之
平尾弘子	平沢高明	平沢房江	平沢美知	松村千代子	宮坂和子
宮坂ちよ江	宮嶋ゆき	目黒恵子	矢島富子	矢島のぶ子	矢島ヒロシ
柳平あい	柳平 晃	柳平いつ子	柳平高好	柳平年子	柳平利子
柳平 文	柳平みのる				

基準点測量委託 株式会社両角測量

遺構測量委託 株式会社東京航業研究所

遺物測量委託 株式会社東京航業研究所

目 次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	1
第1節 遺跡の位置	1
第2節 遺跡の地理的環境	1
第3節 周辺の遺跡	1
第Ⅱ章 調査経緯	3
第1節 発掘調査に至る経緯	3
第2節 調査の方法	7
第3節 調査の経過	7
第Ⅲ章 遺跡の層序	8
第Ⅳ章 遺構と遺物	9
第1節 先土器時代	9
第2節 繩文時代	9
(1) 住居址	9
第1号住居址	9
第2号住居址	10
第3号住居址	11
第4号住居址	11

第 5 号住居址	12
第 6 号住居址	13
第 7 号住居址	14
第 8 号住居址	16
第 9 号住居址	17
(2) 土 坑	28
(3) 集 石	37
(4) ロームマウンド	38
(5) 道構外出土の遺物	38
出土遺物一覧表	56
第V章 まとめ	58

挿図目次

第1図 蔊田頭B遺跡位置図 (1/25,000)	2
第2図 地形と発掘区域及びグリッド設定図 (1/2,000)	4
第3図 遺構分布図 (1/500)	5・6
第4図 遺跡の層序 (1/40)	8
第5図 先土器時代の遺物 (2/3)	9
第6図 第1号・第2号住居址 (1/60)	18
第7図 第1号・第2号住居址出土遺物 (1/3、1/4)	19
第8図 第3号・第4号住居址 (1/60)	20
第9図 第3号・第4号住居址出土遺物 (1/3、1/4、1/6)	21
第10図 第5号・第6号住居址 (1/60)	22
第11図 第5号住居址出土遺物 (1/3、1/4、1/6)	23
第12図 第7号住居址 (1/60)	24
第13図 第7号住居址出土遺物 (1/3、1/4)	25
第14図 第7号住居址出土遺物 (1/3)	26
第15図 第8号住居址 (1/60) 出土遺物 (1/3、1/4)・第9号住居址 (1/60)	27
第16図 第1・4号土坑 (1/40)、出土遺物 (1/3)	39
第17図 第7・10号土坑 (1/40)、出土遺物 (1/3)	40
第18図 第11・17号土坑 (1/40)、出土遺物 (1/3)	41
第19図 第19・30号土坑 (1/40)	42

第20図	第50・57号土坑（1/40）、出土遺物（1/3）	43
第21図	第59・65・68号土坑（1/40）	44
第22図	第2・3・14・15・16・18・20号土坑（1/40）、出土遺物（1/3）	45
第23図	第23・24・25・26・29・35・37号土坑（1/40）、出土遺物（1/3）	46
第24図	第40・41・42・44・45・46・47・52・53・54・56・58号土坑（1/40）、 出土遺物（1/3）	47
第25図	第63・66・67・69・77・78・82・90・91・102号土坑（1/40）、 出土遺物（1/3、1/4）	48
第26図	第104・105・108・109・110・111・112・113号土坑（1/40）、 出土遺物（1/3、1/4）	49
第27図	第114・115・116・117・119号土坑（1/40）、出土遺物（1/3）	50
第28図	第122号土坑（1/40）、出土遺物（1/4）	51
第29図	第122・129号土坑出土遺物（1/3、1/6）	52
第30図	第123・127・128・130・145号土坑（1/40）、出土遺物（1/3）	53
第31図	集石（1/20）	54
第32図	遺構外の遺物（1/3）	55

図版目次

巻頭図版 1	稗田頭B遺跡	図版 6-1 第6号住居址
巻頭図版 2	第7号住居址土偶出土状況	図版 6-2 第6号住居址土層断面
巻頭図版 2	第2号土坑石製装身具出土状況	図版 7-1 第7号住居址
図版 1-1	第1号住居址	図版 7-2 第7号住居址地床炉断面
図版 1-2	第1号住居址炉体土器埋設状態	図版 7-3 第7号住居址土偶出土状況①
図版 2-1	第2号住居址	図版 7-4 第7号住居址土偶出土状況②
図版 2-2	第2号住居址炉体土器	図版 7-5 第7号住居址土偶出土状況③
図版 2-3	第2号住居址炉体土器断面	図版 8-1 第8号住居址
図版 3-1	第3号住居址	図版 8-2 第9号住居址
図版 3-2	第3号住居址炉体土器	図版 9-1 台地南側肩部に並ぶ陥し穴群
図版 3-3	第3号住居址炉体土器断面	図版 9-2 第1号土坑
図版 3-4	第3号住居址遺物出土状況	図版 9-3 第4号土坑
図版 4-1	第4号住居址	図版 10-1 第7号土坑
図版 4-2	第4号住居址遺物出土状況①	図版 10-2 第10号土坑
図版 4-3	第4号住居址遺物出土状況②	図版 10-3 第11号土坑
図版 5-1	第5号住居址	図版 11-1 第17号土坑
図版 5-2	第5号住居址遺物出土状況①	図版 11-2 第19号土坑
図版 5-3	第5号住居址遺物出土状況②	図版 11-3 第30号土坑

図版12-1	第50号土坑	図版18-7	第128号土坑
図版12-2	第57号土坑	図版19-1	第122号土坑①
図版12-3	第59号土坑	図版19-2	第122号土坑②
図版13-1	第65号土坑	図版19-3	第130号土坑
図版13-2	第68号土坑	図版19-4	第145号土坑
図版13-3	第2号土坑	図版20-1	第1号集石
図版13-4	第2号土坑石製身具出状況	図版20-2	第2号集石
図版14-1	第3号土坑	図版21-1	第1号ロームマウンド
図版14-2	第14号土坑	図版21-2	第1号ロームマウンド土層断面
図版14-3	第15号土坑	図版21-3	第2号ロームマウンド
図版14-4	第16号土坑	図版21-4	第2号ロームマウンド土層断面
図版14-5	第18号土坑	図版21-5	第3号ロームマウンド
図版14-6	第20号土坑	図版21-6	第3号ロームマウンド土層断面
図版14-7	第23号土坑	図版21-7	第4号ロームマウンド
図版14-8	第24号土坑	図版21-8	第4号ロームマウンド土層断面
図版15-1	第25・26号土坑	図版22-1	第5号ロームマウンド
図版15-2	第29号土坑	図版22-2	第5号ロームマウンド土層断面
図版15-3	第40・41・42号土坑	図版22-3	第6号ロームマウンド
図版15-4	第35号土坑	図版22-4	第6号ロームマウンド土層断面
図版15-5	第44号土坑	図版22-5	第7号ロームマウンド
図版15-6	第47号土坑	図版22-6	第7号ロームマウンド土層断面
図版15-7	第52号土坑	図版22-7	第8号ロームマウンド
図版16-1	第53号土坑	図版22-8	第8号ロームマウンド土層断面
図版16-2	第58号土坑	図版23-1	第9号ロームマウンド
図版16-3	第63号土坑	図版23-2	第9号ロームマウンド土層断面
図版16-4	第66号土坑	図版23-3	第10号ロームマウンド
図版16-5	第67号土坑	図版23-4	第10号ロームマウンド土層断面
図版16-6	第69号土坑	図版23-5	第11号ロームマウンド
図版16-7	第82号土坑	図版23-6	第11号ロームマウンド土層断面
図版16-8	第90号土坑	図版24-1	第1号住居址炉体土器
図版17-1	第91号土坑	図版24-2	第1号住居址炉体土器
図版17-2	第104号土坑	図版24-3	第2号住居址炉体土器
図版17-3	第102号土坑	図版24-4	第3号住居址炉体土器
図版17-4	第110・111号土坑	図版25-1	第5号住居址出土土器
図版17-5	第109号土坑	図版25-2	第8号住居址炉体土器
図版17-6	第113号土坑	図版25-3	第69号土坑出土土器
図版18-1	第114号土坑	図版25-4	第111号土坑出土土器
図版18-2	第115号土坑	図版26-1	第117号土坑出土土器
図版18-3	第117号土坑	図版26-2	第122号土坑出土土器
図版18-4	第116号土坑	図版26-3	第122号土坑出土土器
図版18-5	第123号土坑	図版26-4	表探土器
図版18-6	第127号土坑	図版27	第7号住居址出土土偶

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

稗田頭B遺跡（市遺跡番号209）は茅野市泉野下榎木地区に所在し、茅野駅の東7kmに位置する。稗田頭Bの遺跡名は、所在地の字名からつけられたものである。稗田頭B遺跡の現状は大部分が畠地のほか一部が山林となっている。「稗田頭（ひえだがしら）」と呼ばれる場所には、遺跡が3つ確認されており、西から稗田頭A、稗田頭B、稗田頭Cとそれぞれを呼称している。稗田頭Aは平成4年度に発掘調査され、稗田頭Cは平成5年度に発見され、この年に発掘調査されている。共に県営圃場整備事業に伴う緊急発掘調査であり、茅野市教育委員会が実施したものである。

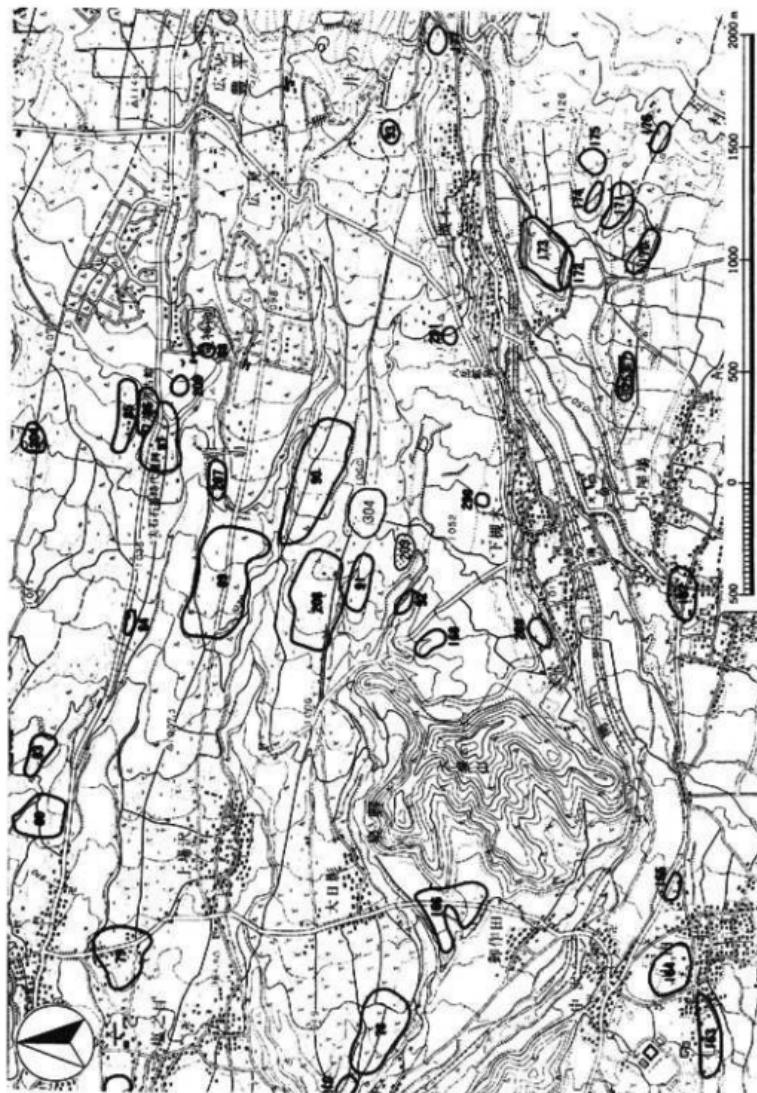
第2節 遺跡の地理的環境

八ヶ岳西南麓の裾野は、大泉山と小泉山の山間を流れる柳川の渓谷により南北に区分される。大泉山・小泉山・柳川の以北は北八ヶ岳の火山活動によって形成された地域である。この地域は北山浦と呼ばれ、豊平、米沢、湖東、北山、泉野の集落が立地する。裾野は小河川の浸食により東西に長い台地が発達している。台地は先端に向かうにしたがって湧水や小溪流の浸食により、次第に複雑に分岐し、上川沖積地帯へと達する。縄文時代の遺跡が濃密に分布する地域であり、稗田頭B遺跡もその一つである。

遺跡は八ヶ岳の山腹に位置する広見地区から東方より西方へ延びる台地の一つが1,052m付近で南へ分岐した尾根状台地に立地する。台地の分岐する手前には稗田頭C遺跡があり、北に分岐した台地に稗田頭A遺跡がある。台地は分岐点よりの長さが約450m、最大幅が約120mあり、遺跡は台地の幅が最も広い場所を中心として位置している。遺跡の標高は1,040~1,055mを測る。台地の上部は平坦で西側に緩く傾斜している。遺跡の北側斜面は平坦面より15~30m程続き農業用水路へと達する。南側斜面も同様に平坦面より15~30m程続き栗生沢へ落ち込む崖に達する。崖は浸食作用が進み切り立っている。遺構検出面の台地の北側、南側斜面の傾斜は共に現地面より急峻である。

第3節 周辺の遺跡

稗田頭A遺跡（市遺跡番号91） 平成4年度県営圃場整備事業榎木地区に伴い調査。縄文時代前期末竪穴住居址1、中期初頭竪穴住居址3、中期前半竪穴住居址4、中期後半竪穴住居址24、後期住居址1、陥し穴5、土坑多数が検出されている。周辺の遺跡の中で、規模が大きく、長期に亘って継続した遺跡である。



第1図 桑田頭B遺跡位置図(1/25,000)

中原遺跡（市遺跡番号92） 平成3年度県営圃場整備事業桜木地区に伴い調査。縄文時代早期末から前期初頭の竪穴住居址2、中期初頭竪穴住居址1、陥し穴1、土坑7が検出されている。

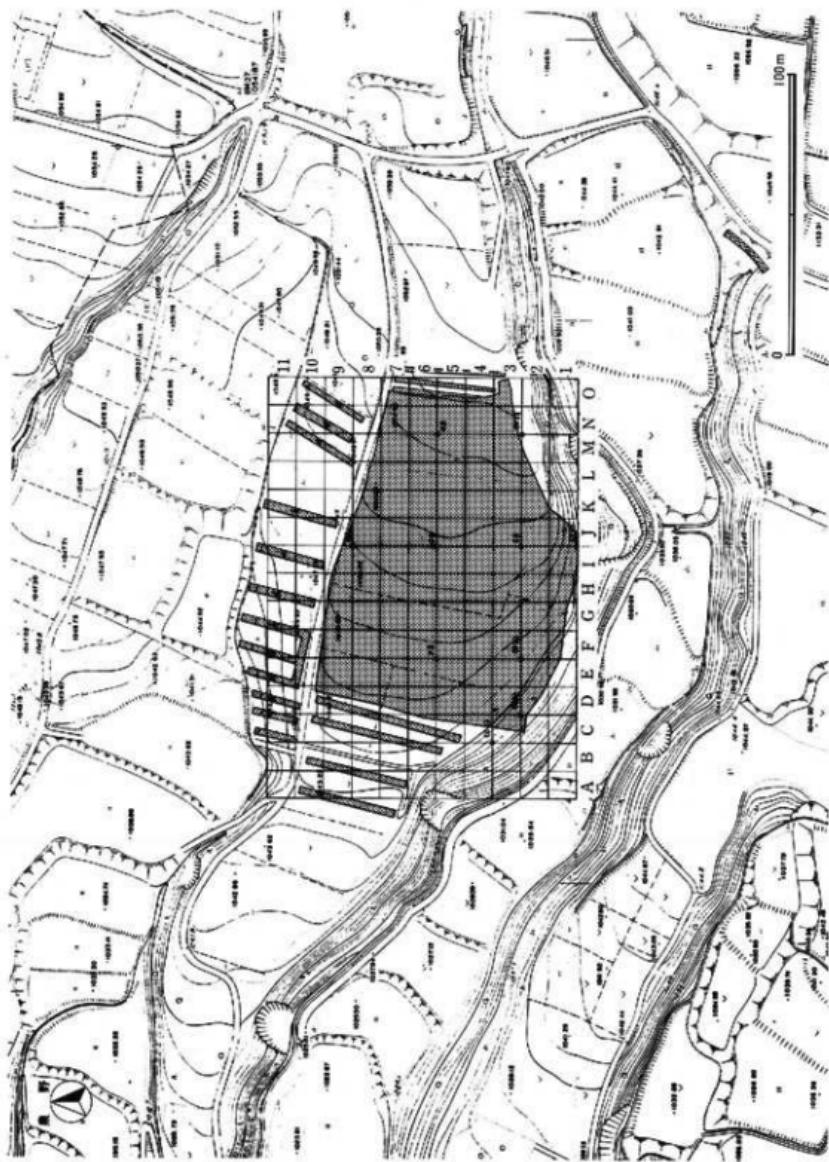
上見遺跡（市遺跡番号168） 平成2年度県営圃場整備事業桜木地区に伴い調査。先土器時代遺物ブロック、縄文時代中期初頭の土坑、陥し穴群が検出されている。居住遺構の検出はない。

稗田頭C遺跡（市遺跡番号304） 平成5年度県営圃場整備事業桜木地区に伴い調査。縄文時代中期初頭竪穴住居址9、土坑735、平安時代後半竪穴住居址1が検出されている。

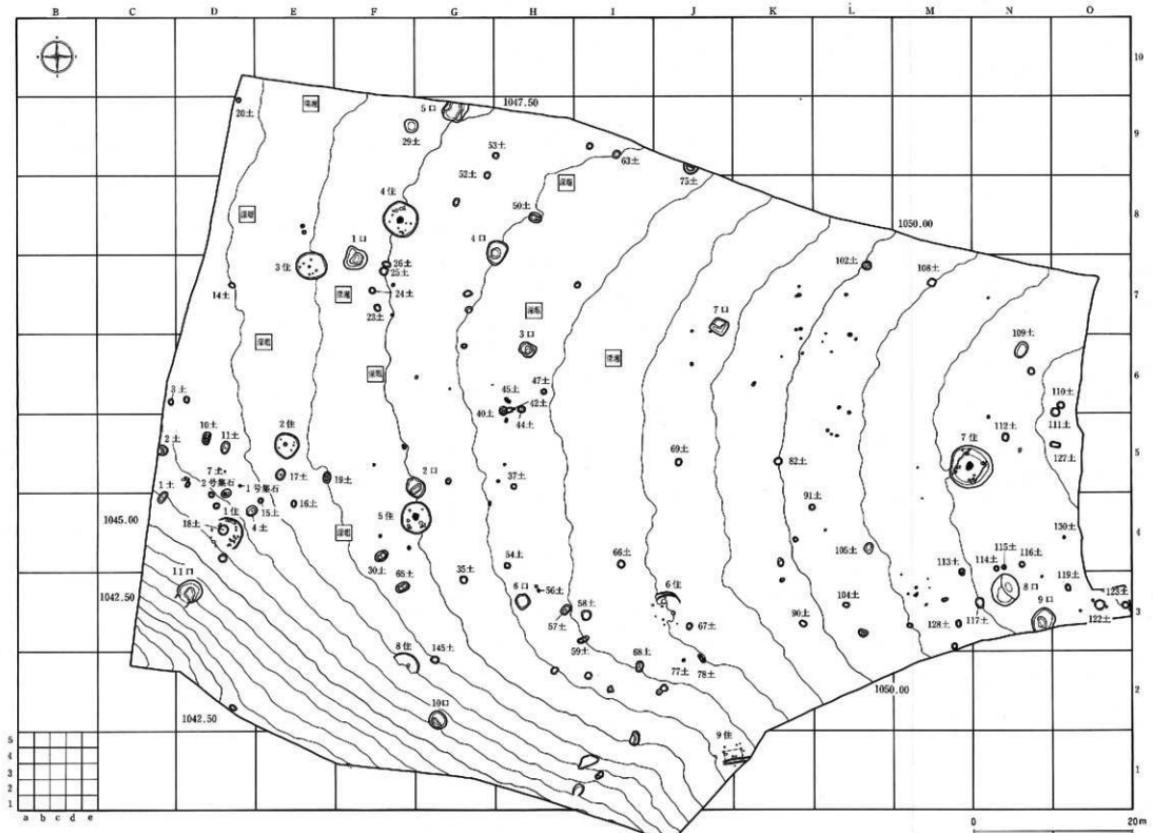
第II章 調査経緯

第1節 発掘調査に至る経緯

田畠經營の合理化を目的とする県営圃場整備事業が、長野県諏訪地方事務所により平成5年度に桜木地区に計画された。事業範囲に稗田頭B遺跡が位置することから、平成5年2月8日に長野県教育委員会文化課、長野県諏訪地方事務所土地改良課、茅野市農業基盤整備課、茅野市教育委員会の四者により保護協議がもたれた。協議結果を受け、平成5年3月11日付4教文第7-90-37号「平成5年度県営圃場整備事業（桜木地区）にかかる埋蔵文化財の保護について（通知）」が長野県教育委員会により提出された。それによると、稗田頭B遺跡の保護については、発掘調査による記録保存とし、発掘調査は茅野市教育委員会に委託する。調査にかかる経費については、事業主体者が負担する。ただし、農家負担分については、文化財保護側が負担するというものであった。発掘調査計画書では、3,900m²以上を発掘調査し、その経費総額は6,700,000円（農政部局負担分5,896,000円、文化財保護側負担分804,000円）であった。この計画を受けて、茅野市教育委員会では、平成5年度文化財関係補助事業計画を上げ事業にそなえた。本調査に先立ち、平成5年4月14日から16日にかけて遺跡範囲を確認するための試掘調査が行われた。この結果、遺跡該当範囲である尾根状台地の幅が最も広くなる中央部平坦面に集落が展開していることを確認し、遺跡の西側の限界をほぼ推定した。しかし、この時点では、遺跡の東側に調査の同意書が得られていなかったため、遺跡の範囲を明確にすることは出来なかった。調査の同意書が得られた後、改めて試掘調査した結果により、必要となる調査面積は約7,500m²と考えられた。調査面積が当初の計画を大きく上回ったことにより、平成5年8月24日付4教文第7-90-37号「平成5年度県営圃場整備事業（桜木地区）にかかる埋蔵文化財の保護について（通知）」が長野県教育委員会から提出された。その内容は、7,500m²以上を発掘調査し、その経費総額を17,500,000円（農政部局負担分15,400,000円、文化財保護側負担分2,100,000円）に事業を変更するというものであった。現地発掘調査は、平成5年7月16日より開始した。



第2図 地形と発掘区域及びグリッド設定図 (1/2,000)



第3図 造構分布図 (1/500)

略号例 1住→第1号住居址、1土→第1号I号、1ロームマウンド

第2節 調査の方法

調査範囲内にグリッドを設定し、遺構、遺物の記録、遺物取上げの基準とした。グリッドの設定は、公共座標 $x = 50.000$ 、 $y = -24,280.000$ を基準軸とし、10m四方の大グリッドの中に2m四方の小グリッドを配置した。大グリッドの呼称は、 x 軸を大文字のアルファベット、 y 軸を数字で示し、小グリッドの呼称は x 軸を小文字のアルファベット、 y 軸を数字で示している（例 Bla1 第3図参照）。

表土剥ぎ作業は、重機により行った。この作業は、耕作土を全面除去した後、遺構確認面まで下げる方法をとっている。耕作土を除去している段階から、遺構を検出する努力をしているが、この面で確認できた遺構はない。最終的に重機により、第4層ローム漸移層の中面から第5層ソフトローム層上面まで下げて確認面としている。

第3節 調査の経過

7月16日 遺跡東側に試掘トレンチを6本入れる。この結果、第1トレンチから住居址1軒、第2トレンチから土坑を4基検出。第3トレンチ以東からは遺構は検出されず。この結果から遺跡の東側限界を推定し、4月14日から16日にかけて行われた試掘結果とあわせて、調査範囲を確定する。重機により表土剥ぎ作業を開始。	10月14日 第5号住居址発掘開始。
7月29日 耕作土除去終了、遺構確認追下げ。	10月21日 八ヶ岳に初冠雪。
8月11日 表土剥ぎを終了。	11月4日 第6号住居址発掘開始。
8月13日 グリッド基準杭の設置。	11月9日 第7号住居址発掘開始。
8月31日 遺構の発掘を開始。	11月24日 第7号住居址より土偶が出土。
9月1日 第1号集石遺構を確認。	11月25日 遺跡は一面霜に覆われる。霜取り作業に手間取り調査は進まない。以後、連日霜に悩まされながらの調査となる。
9月16日 第1号住居址発掘開始。	11月26日 調査予定地である遺跡南側斜面の山林の伐採が始まる。
9月24日 第2号土坑より石製装身具が出上。	11月30日 山林部の表土剥ぎ作業を開始。
9月27日 第2号住居址発掘開始。	12月3日 第8号住居址の発掘開始。
10月4日 第3号住居址発掘開始。	12月6日 台地南側斜面にグリッド基準杭設置。
10月5日 第4号住居址発掘開始。	12月8日 第9号住居址写真撮影。
10月13日 基本層序の確認と記録。	12月15日 航空測量の実施。
	12月17日 発掘機材の撤出及び深掘り作業を実施。
	12月20日 現場調査をすべて終了する。

第III章 遺跡の層序

基本層序は台地の幅が最も広くなる部分の中央部で確認した。この場所は、G7e1e2グリッド東壁に相当する。本遺跡の層序は上位から、1. 黒色土、2. 黒色土、3. 暗褐色土、4. 褐色土、5. 黄褐色土、6. 黄褐色土となっている。

第1層 黒色土 耕作土である。粒子細かく、締まり、粘性共がない。ローム粒子・微小なローム塊と炭化物及び焼土塊を僅かに含む。第2、第3層との層界は平坦面然としており、下層を削平している。

第2層 黒色土 粒子細かく、締まり、粘性共がない。ローム粒子、微小なローム塊を僅かに含む。第1層下に部分的に観察される。

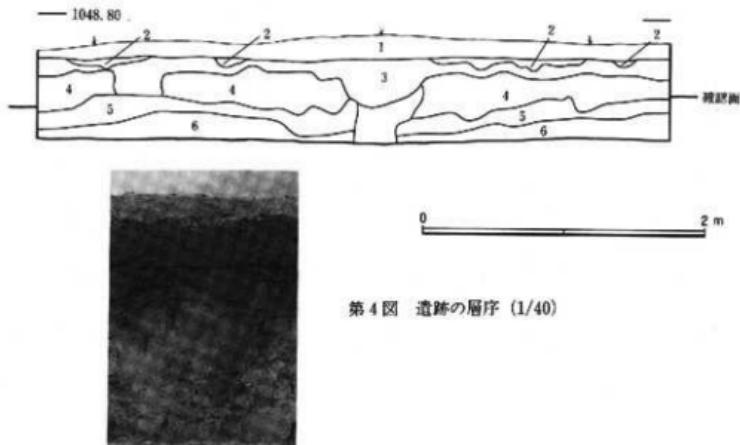
第3層 暗褐色土 粒子はやや粗く、締まっている。粘性はほとんどない。ローム粒子、微小なローム塊・炭化物を僅かに含む。

第4層 褐色土 粒子はやや粗く、締まっている。粘性は僅かにある。ローム漸移層である。

第5層 黄褐色土 粒子細かく、締まりは強い。粘性は僅かにある。ソフトローム層である。

第6層 黄褐色土 粒子細かく、締まりは非常に強い。粘性は僅かにある。第5層に比してやや白味をおび明るい。ハードローム層である。

台地平坦面における土層の堆積状態には概ね変化がみられない。各層で遺物包含層と認定できるものは、第1層の耕作土のみである。耕作土以下からは、遺物の出土は皆無に近い。基本層序確認面において観察された第3層からの落ち込みは、遺構とは思われなかった。

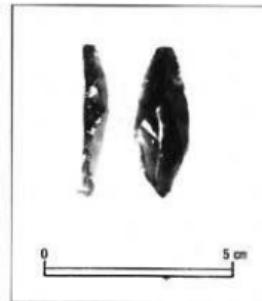


第4図 遺跡の層序 (1/40)

第IV章 遺構と遺物

第1節 先土器時代

発掘調査以前の表面採集資料の中にナイフ形石器が1点含まれており、本遺跡には先土器時代の遺構が存在する可能性があった。そのため重機による表土剥ぎ作業の後の遺構検出作業には気を配ったが、先土器時代の遺物、遺構は共に検出されなかった。この後、ランダム・サンプリングにより合計9箇所の小グリッドを掏出し（第3図参照）、深掘りをかけたが、遺物、遺構の検出はなかった。深掘りは、遺構確認面から基本層序で示した第6層ハードロームを約20cmまで下げる段階で終了している。表面採集されたナイフ形石器を右に示す。



第5図 先土器時代の遺物(2/3)

第2節 繩文時代

(1)住居址

住居址は9軒検出されている。時期は全て中期初頭に帰属するものと思われた。

第1号住居址（第6図1・第7図1・図版1）

D4d3グリッドを中心に位置する。場所は台地の平坦面に近い南西に傾斜する南側斜面である。遺跡内では最西端で検出された住居址である。検出時には遺構平面の半分以上が擾乱を受けていたが、床面までいたる擾乱は少なかった。検出されたのは住居址の北西部から南東部にかけてである。第18号土坑と重複し、本址の方が新しい。

検出された部分から平面形は円形もしくは橢円形と推定される。検出された壁は北東部が最も高く15cm程を測り徐々に低くなる。なだらかに立ち上がる壁である。床面は全体的に軟弱であり緩く南西方向へ傾斜している。主柱穴と考えられるビットはP₁～P₇である。南西部からは、再三にわたり掘り下げたが、主柱穴と思われるビットは検出されていない。主柱穴はP₁とP₂、P₃とP₄、P₆とP₇の様に2本1組の隣接する関係が認められる。この柱穴の配列と後述する炉体土器のあり方から、本址は改築のなされた住居址と考えられるが、南西部から主柱穴が検出されなかったこともあり、主柱穴間の組合せは判然としない。主柱穴以外の落ち込みは、擾乱の可能性の高いものである。北部の壁際の溝も周溝ではなく擾乱の可能性が高い。

炉は埋甕炉である。炉体土器は2個体遺存しており、内側の土器（炉体土器1・第7図1-1）が外側の土器（炉体土器2・第7図2-2）を壊して設けられている。埋甕炉の壠方と炉体土器内部の覆土には微小な焼土塊が僅かに点在している。2個体の炉体土器は共に第18号土坑の覆土に埋設されている。土坑上面に貼床は検出されていない。炉体土器1は胴下半部を切断した深鉢形土器を正位に埋設している。口縁部は1/5程が残る。炉体土器2は平出三Aの深鉢の口縁部と胴部を切断した頸部を正位に埋設したもので1/3程が残る。頸部の上端は疑似口縁で、再生加工の痕跡が残る。

住居址の覆土は2層に分層された。第1層は黒褐色土でローム粒子を僅かに含む。第2層は暗褐色土でローム粒子・2mm以下のローム塊・微小な炭化物を僅かに含む。

遺物は少ない。土器は炉体土器の他に、土器片12(260g)※が出土しているのみである。石器は、礫器1(第7図1-5)、碎片1、黒曜石製のものが剥片石器1、碎片・剥片1出土している。その他、礫が5出土している。住居址の東部では長さ65cmの安山岩の角柱状礫が床から僅かに浮いた状態で出土している。

時期は炉体土器1から中期初頭に位置づけられる。

※ 接合した土器片については1片と勘定している。以下同様である。

第2号住居址（第6図2・第7図2・図版2）

E5b3b4c3c4グリッド内に位置する。場所は台地の中央部で平坦な場所である。遺構の遺存状態は良い。

平面形は3.1×3.1mの南部が張り出す不整な円形を呈する。検出された壁は4~24cmを測り北側が高い。壁の立ち上がりの状態は明確であるが、傾斜は強くない。床面は堅い面と軟らかい面との境が顕著である。炉周辺から北東部にかけて堅く、西壁から南壁にかけて軟らかい。堅い床面の北側が最も平坦で凸凹が少ない。炉周辺は僅かながらに盛り上がる。軟らかい面は凸凹も多く、平坦な面は少ない。住居址北西部の床面は北西壁に向けてなだかに高くなり、この部分の壁高が最も低くなっている。主柱穴と考えられるビットはP₁~P₅の5ヶである。P₁~P₂間が167cm、P₂~P₃間が114cm、P₃~P₄間が161cm、P₄~P₁間が109cmを測り、P₁~P₄がほぼ長方形に配列する。P₅は棟持柱であろうか。北側の壁下には連続する小孔が認められた。これ等を掘り下げる深さ2~5cmを測る浅い周溝となった。しかし、小孔は植物の根による擾乱の可能性も高く、これが本址の一部となるかは判断しかねた。

炉は埋甕炉である。炉体土器（第7図2-1）の下部に微小な焼土が僅かに観察された。炉の壠方、炉体土器内部の覆土は、住居址覆土の第1層と差異が認められなかった。炉体土器は胴下半部を切断する深鉢形土器で正位に埋設されている。

覆土は2層に分層された。第1層は暗褐色土で10mm以下の炭化物を多く、ローム粒子・10mm以下のローム塊を疎らに含む。第2層は褐色土で10mm以下のローム塊を多く、ローム粒子を疎らに、

微小な炭化物を僅かに含む。第2層は壁下に部分的に観察される。

遺物は少ない。土器が炉体土器の他に、土器片が40(770g)出土している。石器は、黒曜石製のものか剝片石器3、使用痕のある剝片1、碎片・剝片4出土している。その他、環が1出土している。

本址の時期は炉体土器から中期初頭に位置づけられる。

第3号住居址（第8図1・第9図1・図版3）

E7d5グリッドを中心に位置する。場所は台地中央部のやや北側で平坦な場所である。遺構の遺存状態は良い。

平面形は3.7×3.4mの不整な円形を呈する。検出された壁は北東部が最も高く17cmを測り、南西部に向けて徐々に低くなる。全体的にはだらかな傾斜の壁であるが、北部ほど傾斜が強く南部ほど緩い。床は全体的に締まっているが、炉周辺は一層堅い。壁に近い床は緩い傾斜もって壁にいたる傾向をもつ。床面は炭化物を含む褐色土が散在し、掘り下げたところ、かなり凸凹した床となった。がの北東側床面は周辺より僅かにだらかに高くなり、台地状になっている。

ピットは6ヶ検出されている。P₁～P₄の4ヶが主柱穴と考えられ、P₁～P₂間が104cm、P₂～P₃間が147cm、P₃～P₄間が97cm、P₄～P₁間が152cmを測り、ほぼ長方形に配列する。P₆は出入口施設に関係するものであろうか。壁下のシミ状の部分を掘り下げてみたが、植物等の搅乱によるものと思われた。

炉は埋甕炉である。炉体土器（第9図1-1）は胴下半部を切断する深鉢形土器で正位に埋設されている。炉の壠方は小さく片側に寄せて炉体土器を設置している。埋甕炉の壠方と炉体土器内部の覆土には微小な焼土塊が僅かに点在する。炉体土器の内面下部には僅かに焦げ痕が残っている。住居址の覆土は4層に分層された。第1層は黒褐色土でローム粒子が多く、微小な炭化物を疎らに、5mm以下のローム塊・微小な焼土粒子を僅かに含む。第2層は黒褐色土でローム粒子が多く、5mm以下のローム塊・微小な炭化物を僅かに含む。第3層は暗褐色土でローム粒子を多く、5mm以下のローム塊を疎らに、極小の炭化物を僅かに含む。第4層は褐色土でローム粒子を多く、ローム塊を僅かに含む。

出土遺物は少ない。土器が炉体土器の他に、土器片が13(540g)出土している。石器は、打製石斧1、凹石（磨石）1、敲打器1（第9図1-6）、黒曜石製のものが剝片石器4、ビエス・エスキュー1、碎片・剝片2出土している。その他、環が1出土している。

本址の時期は炉体土器から中期初頭に位置づけられる。

第4号住居址（第8図2・第9図2・図版4）

F8d2d3e2e3グリッドを中心に位置する。場所は台地中央部よりやや北側で平坦な場所である。遺構の遺存状態は良い。

平面形は4.5×4.5mの円形を呈する。検出された壁は20cm前後を測る。なだらかに立ち上がる締まった壁である。床は全体的に平坦で堅緻である。炉の周辺は特に平坦で堅緻である。壁に近い床は緩い傾斜もって壁にいたる傾向にある。ピットは多数検出されている。 $P_1 \sim P_4$ の4ヶが主柱穴と考えられ、 $P_1 - P_2$ 間が167cm、 $P_2 - P_3$ 間が190cm、 $P_3 - P_4$ 間が162cm、 $P_4 - P_1$ 間が180cmを測り、ほぼ長方形に配列する。 P_5 からは黒曜石の剥片石器が、 P_6 からは磨製石斧（第9図2-12）と凹石（磨石）が出土している。

炉は地床炉である。住居址のほぼ中央に僅かに皿状に窪んで径約85cmの範囲にローム床面が焼けている。上面は堅く締まっている。この焼土範囲のほぼ中央にはローム粒子と焼土を含む褐色土の落ち込みがある。

住居址の覆土は5層に分層された。第1層は黒色土で5mm以下の炭化物が多く、ローム粒子・10mm以下のローム塊を僅かに含む。第2層は黒褐色土でローム粒子・5mm以下のローム塊・微小な焼土塊・炭化物・炭化材を僅かに含む。炭化材には形状の残るものもある。焼土塊・炭化物・炭化材は同層の中央部中程を中心として分布している。また、これとは別に地床が上にも焼土塊が点在している。第3層は暗褐色土でローム粒子を多く、5mm以下のローム塊・微小な炭化物と焼土塊を僅かに含む。第4層は暗褐色土で第3層に比してやや土色が明るい。ローム粒子を多く、5mm以下のローム塊・微小な炭化物を僅かに含む。第5層は褐色土でローム粒子、ローム塊を多く、極小の炭化物を僅かに含む。

住居址の北部と北東部の壁際に焼土があった。共に床から浮いた状態であり、床面まではいたっていない。この焼土と覆土に含まれていた焼土塊・炭化物・炭化材から本址は焼失住居である可能性も考えられたが、床面に焼けた痕跡は見られない。したがって住居址がある程度埋没した後に、これらが廃棄されたか、火が使用されたのではないだろうか。

炉址の北東寄りでは土器片と共に大型の石皿（第9図2-7）が幾つかに削れた状態で出土している。出土の様相は住居の廃絶後に、廃棄されたように思われる。石皿には加熱を受けたと思われる痕跡もみられ、上記の火の痕跡との関係が窺われる。

出土遺物は本遺跡の住居址の中では多い。土器は、土器片が55（1,450g）出土している。石器は打製石斧3、磨製石斧2、横刃型石器1、凹石（磨石）5、石皿2、碎片3、剥片2、黒曜石製のものが剥片石器4、使用痕のある剥片1、碎片・剥片7出土している。その他、礫が5出土している。住居址の南部では長さ37cmの四角錐状の礫が出土している。これは先端が床面に僅かにくい込み、底面が床から9cm程浮いた状態である。

本址の時期は出土土器から中期初頭と思われる。

第5号住居址（第10図2・第11図・図版5）

F4e4・G4a4グリッドを中心に位置する。場所は台地の中央よりやや南側で平坦な場所である。北側近くに第2号ロームマウンドがある。遺構の遺存状態は良い。

平面形は4.0×3.7mのやや南北に長い円形を呈する。検出された壁は北東部が最も高く30cmを測り、南西部に向けて徐々に低くなる。床面は全体的に堅緻である。ピットは8ヶ検出されている。主柱穴はP₁～P₆の6ヶと考えられる。P₃とP₅、P₄とP₆は隣接する関係が認められる。住居址の改築、建て直しの痕跡が他に認められなかったため、これは柱の建て直しによるものではないだろうか。但し、覆土に差異は認められず同時存在の可能性も残す。P₁～P₂間が162cm、P₂～P₃間が197cm、P₃～P₄間が207cm、P₄～P₁間が195cmを測り、P₁～P₆がほぼ台形に配列する。また、P₂～P₆間が222cm、P₅～P₆間が209cm、P₆～P₁間が232cmを測り、P₁・P₂・P₃・P₆もほぼ台形に配列する。P₇はロームで埋められた床面である。この上には長さ48cmの大型の軽石が散在していた。

炉は地床炉である。住居址中央に位置し、僅かに皿状に窪んで径90～100cm程の範囲のローム床面が焼けている。上面は堅く締まっている。この焼土範囲のほぼ中央にはローム塊・焼土粒子・焼土塊・炭化物を多く含む暗褐色土の落ち込みがあり、土器片が1出土している。

住居址の覆土は3層に分層された。第1層は黒褐色土でローム粒子・2～20mm程の炭化物・炭化材が多く、10mm以下のローム塊・5mm以下の焼土塊と焼土粒子を僅かに含む。第2層は暗褐色土でローム粒子が多く、微小な炭化物と焼土塊・10mm以下ローム塊を僅かに含む。第3層は暗褐色土で第2層に比してやや土色が明るい。ローム粒子・ローム塊を多く、微小な炭化物を僅かに含む。本址は第1層を中心に観察された焼土塊・炭化物・炭化材等から火災住居の可能性を考えられたが、まとまった焼土ではなく、床面にも焼けた痕跡はなかった。

出土物は本遺跡の住居址の中で一番多い。土器は一括土器（第11図1）が南東部の壁に寄りかかる状態で出土している。底部の最下部は床から1cm程度浮いた状態である。その他は、土器片である。土器は一括土器（1,425g）を除き土器片244片（5,390g）出土している。石器は打製石斧11、横刃型石器1、凹石1、凹石（磨石）1、礫器1、碎片11、剥片2、敲打器1、黒曜石製のものが石錐1、剥片石器4、ビエス・エスキュエ4、碎片・剥片34、使用痕のある剥片1が出土している。その他、礫が17、これとは別に前述した大型の軽石が1出土している。南西部には平石が床上にある。南東部には長さ53cmの円柱状の礫が床上から出土している。

本址の時期は出土土器から中期初頭と思われる。

第6号住居址（第10図2・図版6）

J3a3a4b3b4グリッドを中心に位置する。場所は台地の肩部に近く、緩やかに南西方向に低くなる南側斜面である。検出した時点において炉の焼土と南部の柱穴が2ヶ露出し、北側に薄い覆土を残す状態であった。遺存状態は悪い。

住居址の覆土は2層に分層された。第1層は黒褐色土でローム粒子が多く、10mm以下のローム塊を疎らに、5mm以下の炭化物を僅かに含む。第2層は暗褐色土でローム粒子、ローム塊を多く含む。第2層を剥ぐと非常に凸凹したローム面となり、炉の焼土が浮いた状態になった。このこ

とからすると第2層は本址の堀方の上に張られたものと考えらる。しかし、叩き締められた様な堅固さはなかった。後述するが、本址の炉址上面は脆い焼土となっている。他の地床炉上面が非常に縮まった焼けたロームとなっている状況と異なる。第1層に搅乱を受けた痕跡はみられず、これらを考えあわせると本址は埋没以前に荒れていたのかもしれない。

壁は北部に僅かな痕跡が残るのみである。壁の内側には10cm程度の段差が認められたが、いかなる性格のものか不明である。主柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄の4ヶと考えられ、P₁-P₂間が218cm、P₂-P₃間が154cm、P₃-P₄間が227cm、P₄-P₁間が185cmを測り、長方形に近い台形様に配列する。P₅は炉に隣接するため、独立した土坑とも考えられるが、柱穴の覆土との差異は認められなかった。またほぼ垂直に堀り込まれた小ピットP₆・P₇・P₈が検出されている。

炉は地床炉である。主柱穴の対角線交叉点よりやや北側に寄った位置にある。焼土範囲は40×30cm程度であり、本遺跡の他の地床炉と比べて小さい。上面に脆い焼土が1～2cmの厚さにあり、その下が縮まりのある焼けたロームとなっている。中央にローム粒子・ローム塊・炭化物・焼土塊を含む暗褐色土の落ち込みがある。

遺物は第1層の上面から土器片が2（30g）出土したのみである。

本址の時期を決定できる遺物はない。しかし、中央に落ち込みを持つ地床炉の形態、主柱穴の堀方規模と方形配列などが、本遺跡で中期初頭と確認されている他の住居址と類似することから、この時期に帰属すると考えたい。

第7号住居址（第12図・第13図・第14図・図版7）

M5e2e3・N5a2a3グリッドを中心位置する。台地の中央部の平坦な場所であり、遺跡内では最東端で検出された住居址である。平面規模、掘込みの深さとも本遺跡の住居址の中で最大である。遺構の遺存状態は良い。

平面形は5.3×5.3mのやや不整な円形を呈する。検出された壁は北東部が最も高く52cmを測る。南西部に向けて徐々に低くなり、最低で22cmを測る。ゆるやかに立ち上がり床面から徐々に壁へと移行する。この傾向は壁の高い北東部から南東部にかけて顕著であり、床との境界がはっきりしない。壁はその他の部分で立ち上がりが強い。壁の傾斜はゆるく、かなり凸凹しており縮まっている。上部はローム漸移層中、下部はロームの壁である。

床面は炉址を中心とする平坦で凸凹の少ない内部とその周囲の外部に区分できる。外部は緩やかな傾斜をもち内部に比べてやや凸凹している。外部の北西部と南東部は内部との緩やかな段差がつき、三日月状を呈している。この間の北東部と南西部は段差なく内部に到る。全体的によく縮まとった床である。

ピットは多数検出されている。主柱穴と考えられるものは、P₁abc・P₂abc・P₄ab・P₅abc・P₆・P₇abc・P₈abcである。P₉・P₁₀もその可能性が考えられる。主柱穴はP₁・P₂・P₅・P₇・P₈の様に、同一地点で重複しており、3回の建て直しが考えられる。住居址の南西部と南部に主柱

穴と考えられるピットが集中するのは、住居址を南西方向へ拡張させた結果であると思われる。この理由は、後述する様に炉址の南西方向の移動新設が認められるためである。この場合には、 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_4 \cdot P_7$ の配列と $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_6 \cdot P_8$ の配列が想定できよう。重複する個々の主柱穴の配列の組合せについては不明である。壁下には垂直に埋りこまれたピットが検出されている。 P_{11} からは第13図1に示した土器が出土している。ピットには上面をロームで貼ったものがあり、これはスクリーントーンで示した。

炉址は地床炉であり、2基が重複しているものと思われる。焼土範囲（焼けたローム）の中央に黄褐色土の落ち込みがあり、この南西部に暗褐色土の落ち込みがある。黄褐色土が暗褐色土に切られている。北東部から南西部へ炉を新設した結果と判断し、黄褐色土から北東部を炉址1とし、暗褐色土から南西部を炉址2とした。黄褐色土の落ち込みの底部は焼けていないが、暗褐色土の底部は薄く焼けている。焼土はよく締まっている。

住居址の覆土は2層に分層された。第1層は黒褐色土で20mm以下の炭化物、炭化材を多く、ローム粒子・5mm以下のローム塊・5mm以下の焼土塊を僅かに含む。第2層は暗褐色土でローム粒子・炭化物・炭化材を多く、10mm以下のローム塊を疎らに、5mm以下の焼土塊を僅かに含む。炭化物・炭化材は5~10mm程のものが多いが、50~60mm程のものも残る。第2層は分層はしなかつたが、下部にいくにしたがい、ローム塊・炭化物・炭化材の混入の割合を増す。また本層中には住居址の北側に焼土が3箇所みられた。焼土は床から1~4cm程浮いた状態であり、床面まではいたっていない。最も厚い部分で35mmを測る。

出土遺物に土偶が1点ある。土偶については下記の土偶の項で述べる。土器は土器片が64(1,190g)出土している。石器は打製石斧5、円石1、剥片1、黒曜石製のものが石鏃4、剥片石器4、ビエス・エスキーユ4、石鏃ブランク1、使用痕のある剥片2、碎片・剥片31出土している。その他、礫が4出土している。

本址の時期は出土土器から中期初頭と思われる。

土偶（第12図・第14図28・巻頭図版2・図版7-345・図版27）

本土偶は住居址東部の壁に近い三日月状を呈する傾斜した外部の床面から3cm程浮いて出土している。頭部が西方で住居址内部を向いている。頭部と胸部は3cm程離れ、うつ伏せの状態であった。頭部と胸部の間には土偶の胎土が溶け出していた。顔面は残っていなかったが、顔面部の胎土が一部つきでた形で遺存していた。この出土の様相から、顔面は溶解した結果、遺存していなかったと考えている。出土層位は第2層で、周辺には炭化物が多く観察された。上述した様に、第2層中には炭化物、炭化材の混入が多く、焼土が含まれていた。焼土は床面に到っておらず、本址は廃棄後に埋没過程において火が使用、もしくは廃棄されたことが想定できる。土偶もこの何らかの行為に関係するものであろうか。

土偶は顔面部、左乳房部、及び腹部以下を欠損する。取り上げ直後には一部つきでた形で遺存していた顔面内部の胎土は、保存処理の過程で崩落してしまい、実測図には示されていない。

頭頂部の左一部は住居址南西部の覆土中より出土したものが接合している。頭部と胴部は後頸部で僅かに接合し、形態復元することができた。

土偶の残存部の測定値は、高さ13.5cm、最大幅14.9cm、頭部直径7.8cm、乳房高1.3cm、重さ500gある。

頭部は頂部が平坦な円板状を呈し、後頭部にはリングがつけられている。頭部は沈線文と半肉彫りの三叉文によりほぼ左右対象に施文されている。頭頂部には沈線が同心円状に引かれる。頭頂部後方より始まる一番外側の沈線は、先端ワラビ手状を呈し、円弧をえがいた後、左右で屈曲して側面に到り、垂下してクランク状に折れ、頭部で終結する。リングの左右両脇、クランク状沈線の内側には、巴紋状の丸い沈線がある。側面の真ん中に引かれる沈線は巴紋状の沈線の前で二手に分かれ、玉抱三叉文状の表現となっている。半肉彫りの三叉文は各沈線文が集合する部位に施されている。頭頂部後方の三叉文からリングの内側にかけて直径2mm程の孔が穿たれ、貫通している。胴部は板状で、両手を水平に広げている。乳房間から沈線により正中線が表現されている。

色調は黒褐色を呈する。表面は丁寧に研磨され、締まり、僅かに光沢を持つ。胴部正面には研磨の痕跡が顕著に残っている。土偶胎土の内部は生焼けの状態である。土偶の顔面部が遺存していないかったのは、この焼成状態が原因で、人為によるものではないと考えている。しかし、腰部以下については、すべてが溶解してしまったとは考えがたく、埋没時には本資料に伴っていなかったのであろう。

本土偶は頭部形態から「河童形土偶」の範疇に属する。時期は第7号住居址より出土したことより、中期初頭に帰属しよう。施文手法に次の中期中葉に盛行する玉抱三叉文等の文様が使用されていることから、中期初頭にあっても中葉へと移行していく段階の資料といえようか。

本土偶に注目されるのは、腰部に全周する何らかの刺離痕もしくは胸部と腰部以下の接合痕とも思える痕跡である。この部分は赤褐色を呈し、ひびが多く入る。現在、X線写真の撮影を検討しており、製作技法の解明と合わせて、この点に言及したいと考えている。

第8号住居址（第15図1・岡版8-1）

F2e5グリッドを中心に位置する。場所は台地の南側斜面である。発掘調査前は山林部であり、植物等の影響を強く受けており遺存状態は非常に悪い。検出したのは北側部分だけである。

検出された壁は最高15cmを測る。床面は植物の搅乱が著しく遺存部分は僅かである。床面には一部僅かに焼けている箇所があった。柱穴は床面を何度か掘り下げたが、検出されなかった。これは搅乱が原因して検出できなかつたのではなく、本米柱穴は設けられなかつた可能性が高い。

炉は埋甕炉である。炉体土器（第15図1-1）は胴下半部を切断した小型の深鉢形土器を正位に埋設している。炉体土器は胴部のみが残る。炉壠方、炉体土器内部の覆土に焼土は検出されなかつたが、炉体土器の内面には焦げ跡が残っている。炉体土器の覆土は住居址覆土の第1・2層

と差異が認められなかった。

住居址の覆土は3層に分層された。第1層は黒褐色上で、ローム粒子が多く、10mm以下のローム塊を僅かに含む。第2層は暗褐色土でローム粒子・10mm以下のローム塊を多く含む。第3層は褐色上でローム粒子・10mm以下のローム塊を多く、10mm程度のバミスを僅かに含む。

出土遺物は、土器が炉体土器の他、土器片が6(60g)出土しているのみである。石器は黒曜石製の石鏃1、ビエス・エスキーユ1、使用痕のある剝片1、碎片・剝片13が出土している。その他、礫が4出土している。

本址の時期を決定できる遺物は炉体土器であるが、時期決定できる特徴に乏しい。胎土の様相が本遺跡から出土している中期初頭土器と類似することから、中期初頭の時期を与えておきたい。

第9号住居址（第15図2・図版8-2）

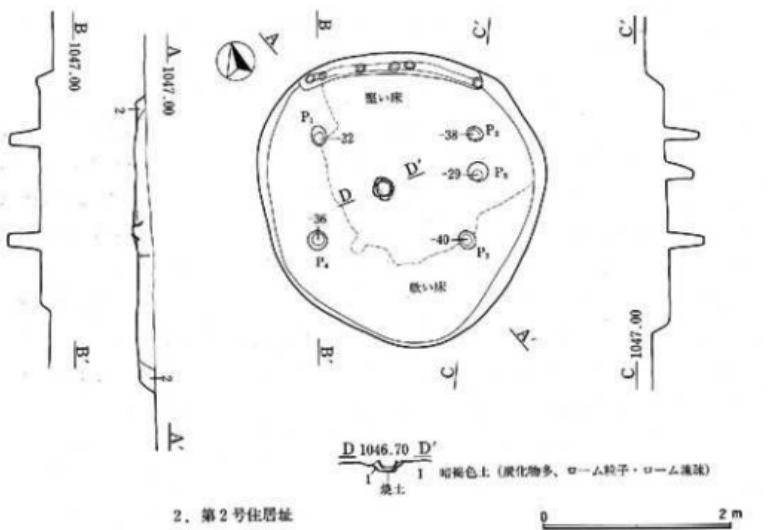
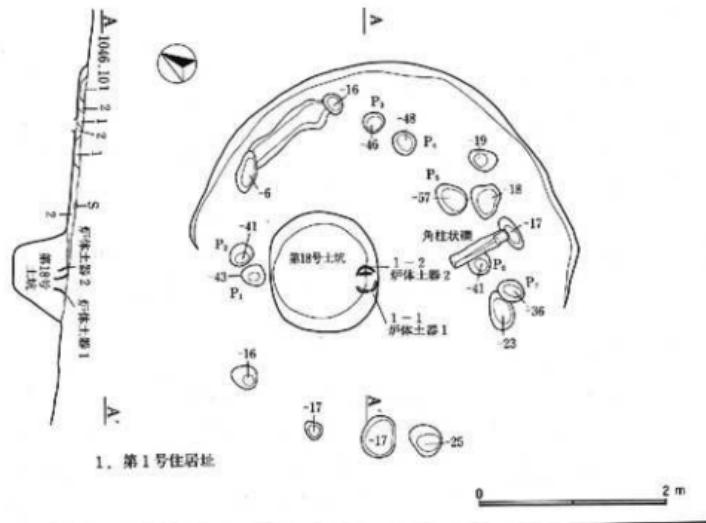
J1e4・K1a4グリッドを中心に位置する。場所は台地の南側斜面である。発掘調査前は山林部の中にある。本址は東方から延びる灌漑排水用と思われる溝によって切られている。

当初、土坑として番号を付した第149・138・148・147号土坑がほぼ長方形に配列し、その堀方から主柱穴と思われた。またこの4ヶの対角線交点に位置する第139号土坑の覆土に少量の焼土と炭化物が検出されていたために、これを炉址として、この一群を第9号住居址とした。

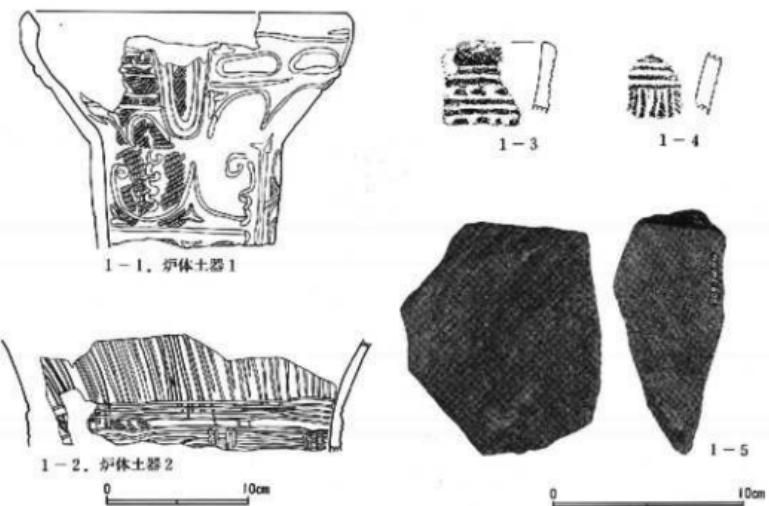
壁、床面とも検出されていない。主柱穴とした土坑間の距離は第149-138号:土坑間228cm、第138-148号土坑間155cm、第148-147号土坑間207cm、第147-149号土坑間147cmを測る。また、本址に伴うと思われるピットが周辺に検出されている。やや西方に離れて位置する第141号土坑は植物の根による擾乱の可能性が高い。炉址とした第139号土坑の覆土は暗褐色土でローム粒子・ローム塊を多く、2mm以下の炭化物と焼土を僅かに含む。側面には非常に僅かであるが、焼けた痕跡も観察されている。第139号土坑は地床所の下部を検出したものと思われる。本遺跡で確認された地床所の焼土範囲の中にはすべて落ち込みが確認されている。第139号土坑はこの地床所の落ち込み部に相当するものと思われる。

出土遺物は第147号土坑から出土した土器片1(10g)と黒曜石の碎片剝片1のみである。土器片に文様はないが、胎土は本址から出土している中期初頭土器と類似する。

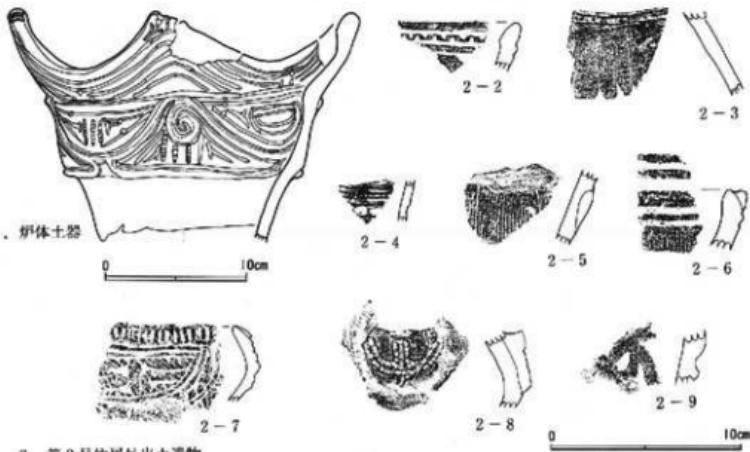
本址の時期を決定するのは難しいが、炉址の様相、柱穴の堀方規模と方形配列、出土した土器片1から本址も中期初頭に帰属するものと考えたい。



第6図 第1号・第2号住居址 (1/60)

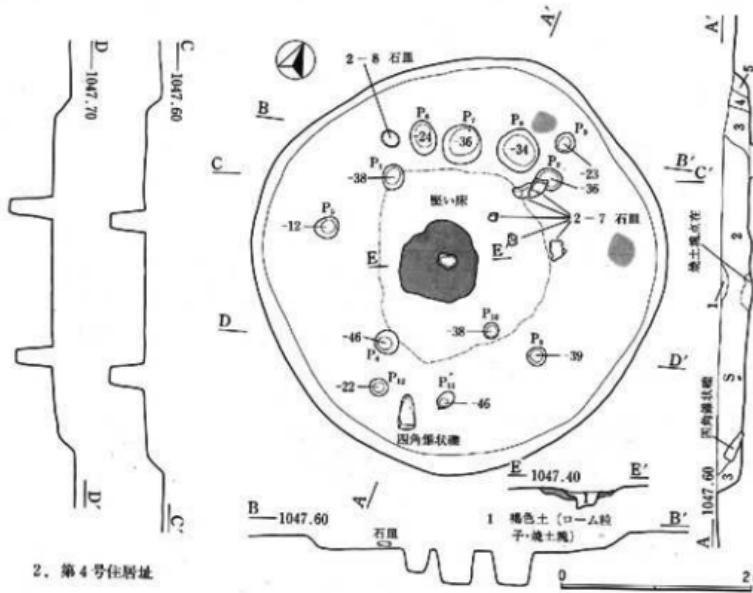
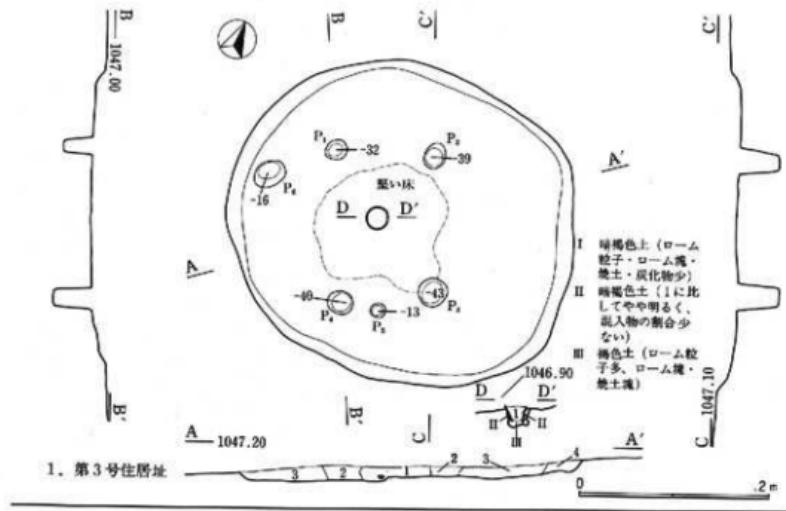


1. 第1号住居址出土遺物

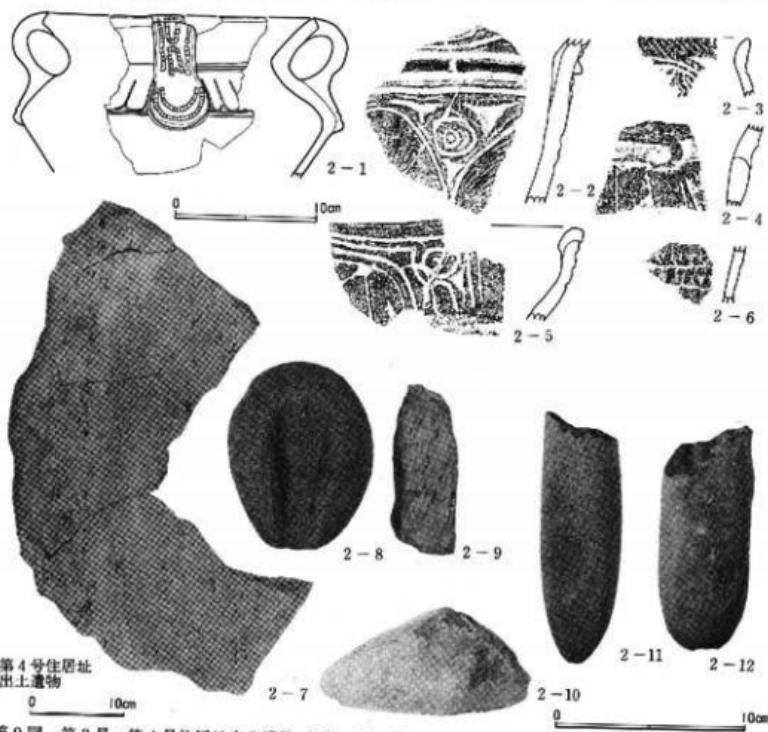
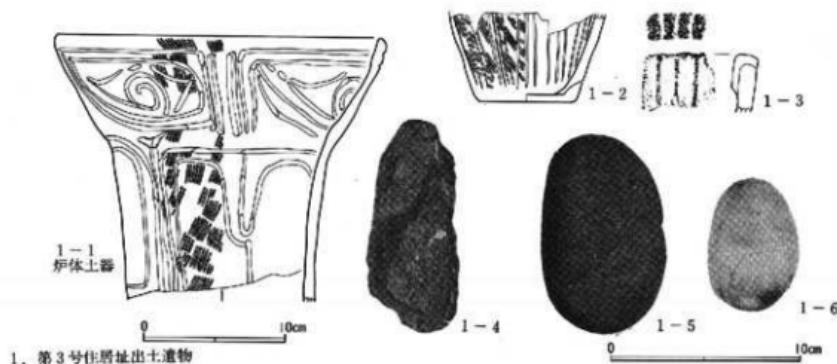


2. 第2号住居址出土遺物

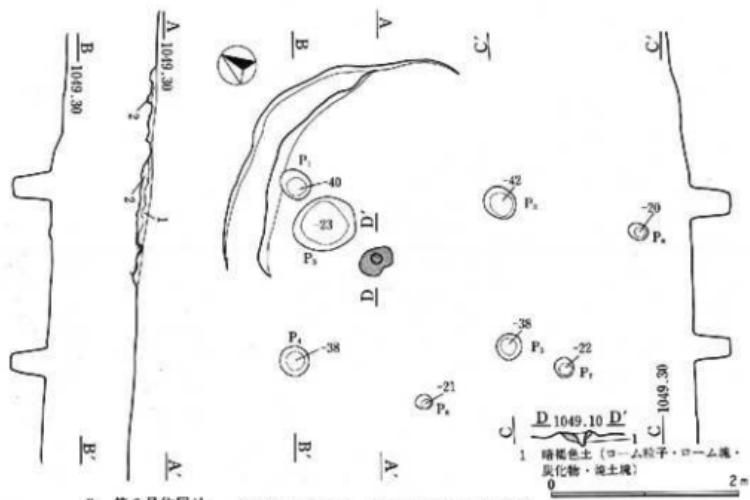
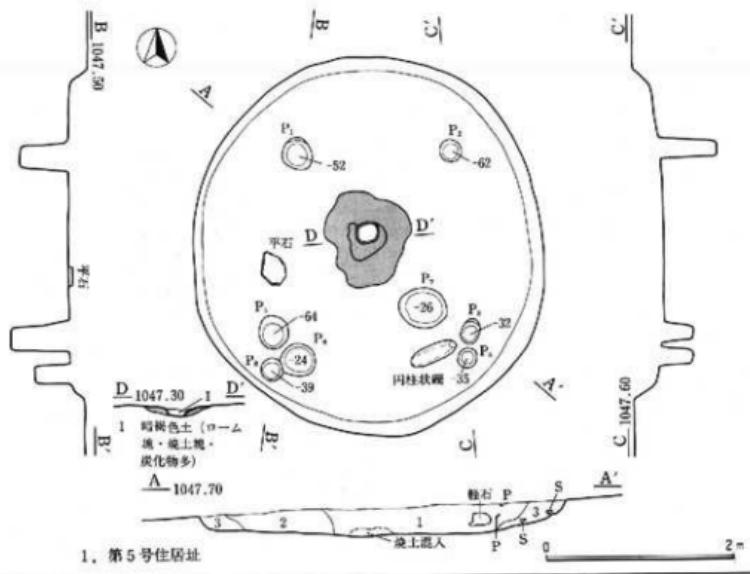
第7図 第1号・第2号住居址出土遺物 (1/3, 1-1・1-2・2-1は1/4)



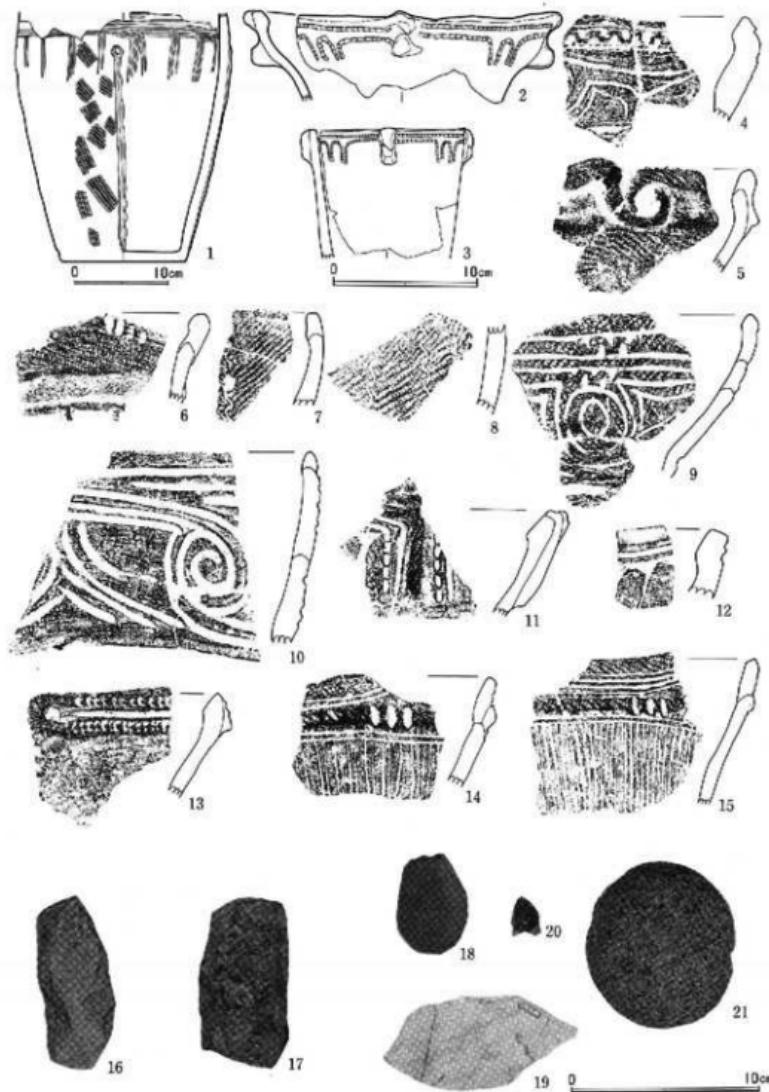
第8図 第3号・第4号住居址 (1/60)



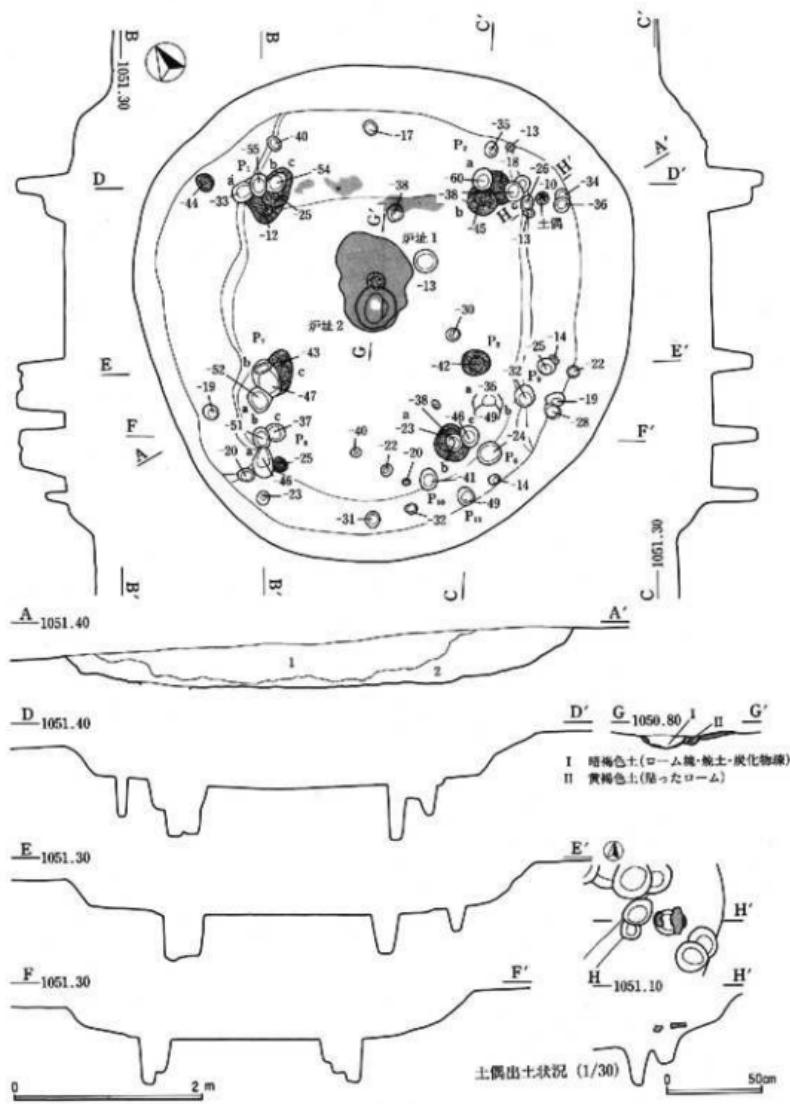
第9図 第3号・第4号住居址出土遺物 (1/3, 1-1・1-2・2-1は1/4, 2-7・2-8は1/6)



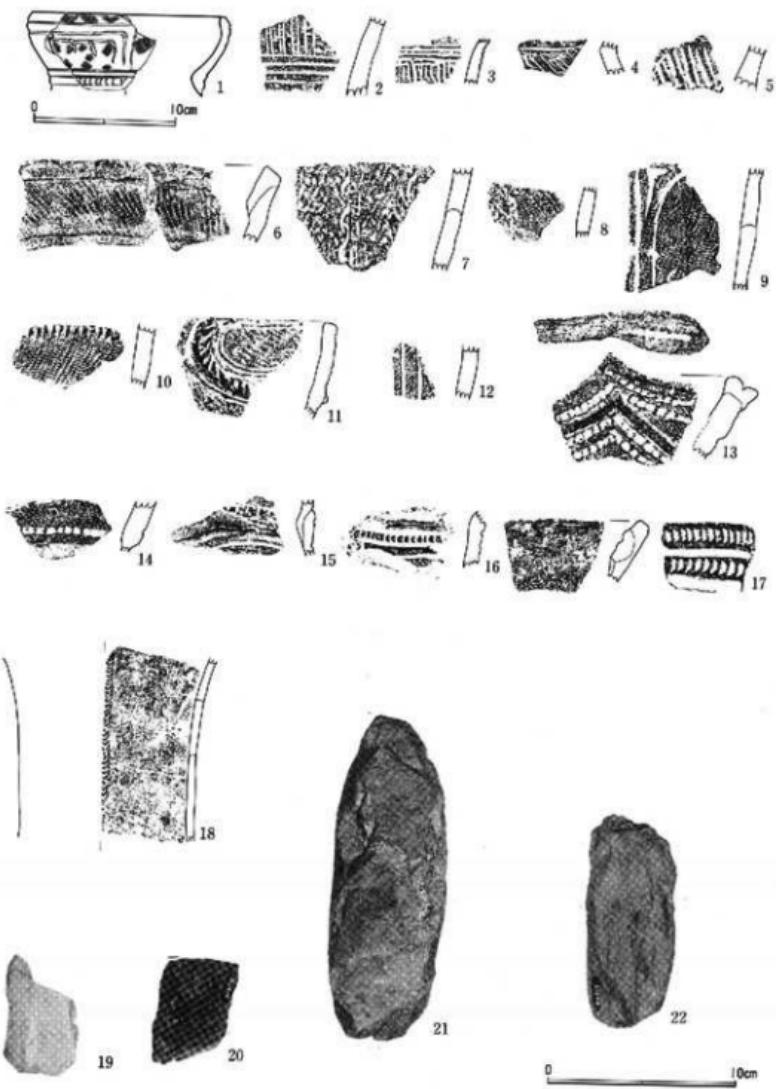
2. 第6号住居址 第10圖 第5号・第6号住居址 (1/60)



第11図 第5号住居址出土遺物 (1/3, 1±1/6, 2・3±1/4)



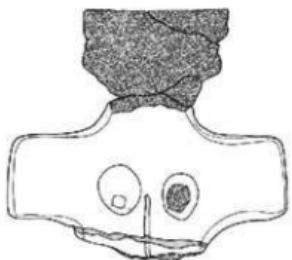
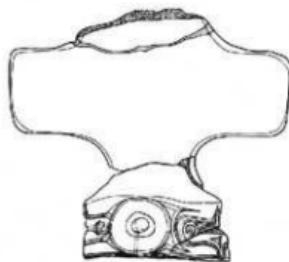
第12図 第7号住居址 (1/60)



第13図 第7号住居址出土遺物 (1/3, 1/3 1/4)



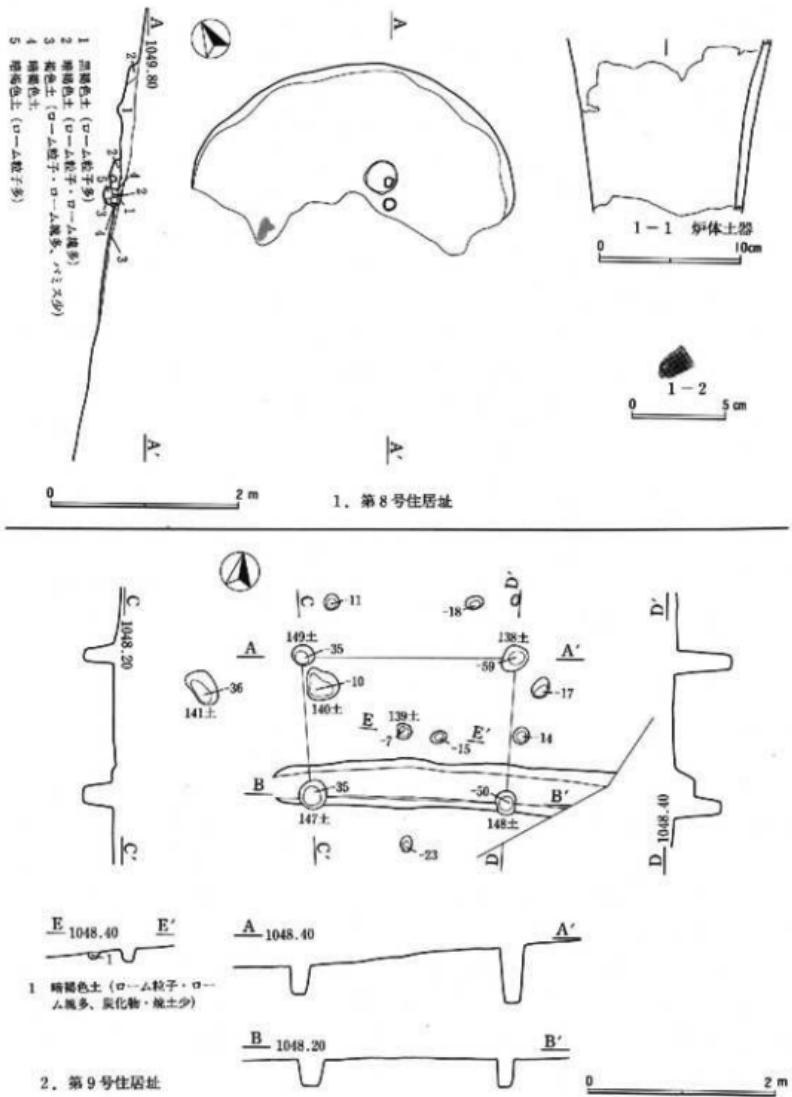
23



28. 土偶

0 10cm

第14圖 第7號住居址出土遺物 (1/3)



第15図 第8号住居址(1/60)出土遺物(1-1は1/4, 1-2は1/3)・第9号住居址(1/60)

(2) 土 坑

形状、規模に關係なく、検出した時点で「穴」として把握されたものを全て土坑とし、149まで番号を付している。この中には、調査が進展するうちに住居址の柱穴や炉となったもの、または相互に關連すると思われるもの、重複が考えられるものも含まれる。これらについては本文中で触れる。この土坑としたもののうち、半数以上は植物の根等の攪乱か、シミ状のものであり遺物の出土もなく、遺構とは認定しがたいものであった。ここでは現時点で、遺構と認識し、それ自身独立して機能していたと考えているものを「土坑」として報告する。遺構分布図（第3図）にもこの「土坑」以外は遺構番号を付していない。「土坑」のうち第75号土坑は現代の野溜めと思われたため報告を省略する。この第75号土坑を除く「土坑」の総数は66基である。遺物を出土して時期を考えることができるのは、全て縄文時代のものであったため、一括してこの節で報告する。用途の特定できるものに、陥し穴があり13基検出されている。したがって陥し穴を除く「土坑」の数は53基となる。報告は①陥し穴②陥し穴以外の土坑の順に行う。

①陥し穴

第1号土坑（第16図1・図版9-2）

C4d5e5グリッドに位置する。平面形はカブセル形を呈し、規模は165×85cmを測る。底面形もカブセル形を呈し、規模は124×49cmを測る。断面形は長軸がクライ状を、短軸が椀状を呈し、深さは44cmを測る。坑底に径25×20cm、深さ38cmのビットが検出されている。ビットにロームを貼った痕跡はない。形態から陥し穴と思われる。遺物は出土していない。

第4号土坑（第16図2・図版9-3）

D4e4e5グリッドに位置する。平面形は梢円形を呈し、規模は142×117cmを測る。底面形も梢円形を呈し、規模は105×66cmを測る。断面形は鉢状を呈し、深さは83cmを測る。坑底に径24×20cm、深さ44cmのビットが検出されている。このビットは暗褐色土の2ヶの穴として検出され、調査の結果、周辺はロームを貼ったものとみられた。遺物は繊維土器片が2（47g）出土している。石器は四石（磨石）が1層土上部より出土している。その他、礫が2出土している。このうちの一つは人頭大程の亜角礫で覆土の中部中央から出土している。形態から陥し穴と思われる。第7号土坑（第17図1・図版10-1）

D4c5d5グリッドに位置する。平面形は梢円形を呈し、規模は131×110cmを測る。底面形も梢円形を呈し、規模は92×63cmを測る。断面形は鉢状を呈し、深さは73cmを測る。坑底から2ヶのビットが検出されている。1ヶは坑底の中央にあり、径21×20cm、深さは35cmを測る。ビットの覆土は第3層と差異が認められなかった。形態から陥し穴と思われる。

本址の覆土上部からは第1層を中心として、礫が集中出土している。これについては本章第3節で第2号集石として報告する。

遺物は土器片が5（138g）出土している。内容は格状体压痕土器1（2層内出土）、繊維土

器2、中期初頭と思われるものが2である。

第10号土坑（第17図2・図版10-2）

D5b4c4グリッドに位置する。平面形はリンク形を呈し、規模は164×93cmを測る。底面形もリンク形を呈し、規模は71×32cmを測る。深さは79cmを測る。本址は南側から東側の側面にかけて段差がつく。これは遺構の重複によるものではなく、こうした壠方がなされたか、崩れによるものと判断している。坑底には径14×14cm、深さ30cmのビットが検出されている。ビットの位置が南側に片寄るため、底部を割ってみたがこの他にビットは検出されなかった。ビットの覆土は第1層と差異が認められなかった。覆土の第1層下部にはローム塊の著しい混入箇所がみられたが、分層は難しい。遺物は黒曜石の碎片・剝片が1出土している。形態から陥し穴と思われる。

第11号土坑（第18図1・図版10-3）

D5c3d3グリッドに位置する。平面形はリンク形を呈し、規模は150×104cmを測る。底面形もリンク形を呈し、規模は123×61cmを測る。断面形は鉢形を呈し、深さは51cmを測る。坑底から2ヶのビットが検出されている。1ヶは坑底のはば中央にあり、径15×14cm、深さは39cmを測る。形態から陥し穴と思われる。覆土中部から人頭大の礫が2出土している。

第17号土坑（第18図2・図版11-1）

E5b1b2グリッドに位置する。平面形はリンク形を呈し、規模は146×112cmを測る。底面形は隅丸長方形を呈し、規模は93×48cmを測る。断面形は鉢状を呈し、深さは70cmを測る。坑底からは二つが切り合う形のビットが検出されている。深い方は坑底の中央にあり、径16×15cm、深さは33cmを測る。ビットは検出時に褐色土の3ヶの穴として把握されたが、調査の結果、周辺はロームで貼ったものであり、上記の形態となった。形態から陥し穴と思われる。遺物は土器片が2(11g)出土している。内容は繊維土器1、中期初頭と思われるもの1である。

第19号土坑（第19図1・図版11-2）

E5e1e2グリッドに位置する。平面形はリンク形を呈し、規模は154×99cmを測る。底面形もリンク形を呈し、規模は77×39cmを測る。断面形は上部の広がる鉢状を呈し、深さは83cmを測る。坑底の中央よりやや北寄りに、径21×16cm、深さ35cmのビットが検出されている。ビット上部からは軽石が出土している。ビットの覆土は第7層と差異が認められなかった。形態から陥し穴と思われる。覆土より礫が2出土している。

第30号土坑（第19図2・図版11-3）

F4c1c2グリッドに位置する。平面形はリンク形を呈し、規模は171×119cmを測る。底面形は隅丸長方形を呈し、規模は120×60cmを測る。断面形は上部の広がる鉢状を呈し、深さは62cmを測る。坑底の中央に径21×16cm、深さ45cmのビットが検出されている。検出時にビットは暗褐色土の2ヶの穴として把握されたが、調査の結果、周辺はロームで貼ったものであり、1ヶの穴となつた。形態から陥し穴と思われる。遺物は出土していない。

第50号土坑（第20図1・図版12-1）

H8c3グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は160×129cmを測る。底面形は隅丸長方形を呈し、規模は96×44cmを測る。断面形は鉢状を呈し、深さは96cmを測る。坑底の中央に径14×13cm、深さ30cmのビットが検出されている。形態から陥し穴と思われる。遺物は遺構覆土の上面より中期初頭と思われる土器片が6(143g)出土している。本址はセクションの観察から、陥し穴の再生利用が考えられたが、明らかでない。

第57号土坑（第20図2・図版12-2）

H3e3グリッドに位置する。平面形はリンク形を呈し、規模は131×90cmを測る。底面形は隅丸長方形を呈し、規模は100×57cmを測る。断面形は鉢形を呈し、深さは48cmを測る。坑底からはビットが3ヶ検出されている。坑底の中央に位置するビットは径17×11cm、深さ46cmを測る。このビットは検出時に暗褐色土の2ヶの穴として把握されたが、調査の結果、周辺はロームで貼つたものであり、1ヶの穴となった。形態から陥し穴と思われる。覆土上部より礫が1出土している。

第59号土坑（第21図1・図版12-3）

I3a1グリッドに位置する。平面形はカプセル形を呈し、規模は148×55cmを測る。底面形もカプセル形を呈し、規模は100×26cmを測る。断面形は長軸が鉢状を呈し、深さは62cmを測る。坑底から径21×19cm、深さ30cmのビットが検出されている。形態から陥し穴と思われる。礫が1出土している。

第65号土坑（第21図2・図版13-1）

F3d5e5グリッドに位置する。平面形はリンク形を呈し、規模は173×110cmを測る。底面形は隅丸長方形を呈し、規模は118×55cmを測る。断面形はやや上部の広がる鉢状を呈し、深さは66cmを測る。坑底の中央に径20×14cm、深さ45cmのビットが検出されている。このビットは検出時に暗褐色土の2ヶの穴として把握されたが、調査の結果、周辺はロームで貼つたものであり、1ヶの穴となった。形態から陥し穴と思われる。遺物の出土はない。

第68号土坑（第21図3・図版13-2）

I2d5e5グリッドに位置する。平面形はリンク形を呈し、規模は135×90cmを測る。底面形は隅丸長方形を呈し、規模は105×50cmを測る。断面形は鉢状を呈し、深さは73cmを測る。坑底にはビットが3ヶ検出されている。坑底の中央に位置するビットは径15×10cm、深さは25cmを測る。形態から陥し穴と思われる。遺物の出土はない。

②陥し穴以外の土坑

第2号土坑（第22図1・卷頭図版2・図版13-3・4）

C5d3e3グリッドに位置する。本址は遺構の存在に気がつかず、発掘用貯水池を造る際に、遺構の上部及び西側の一部を破壊している。平面形は円形を呈し、長径推定135cm、短径128cmを測る。底面形も円形を呈し、長径推定120cm、短径108cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは30cm

を測る。本址内には板状、亜角塊状の礫が最低でも13は組まれていたと思われるが、記録は残存部のみである。残存部の構成は坑底に組まれた板状礫2、亜角塊状礫2、凹石(磨石)1、そして板状礫の下、遺構内の最下部より出土した石製裝身具1である。板状礫は石皿もしくは石臼として使用されたかと思われるものもある。石製裝身具は外周直径7.5cm、内周直径3.6cmで、両端に穿孔が施されている。石材は蛇紋岩系のものを使用している。本址の時期を決定できる遺物は出土していない。又、本遺跡内に類似する遺構も検出されていない。

第3号土坑（第22図2・図版14-1）

C6e1グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は75×72cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は56×55cmを測る。断面形は桶状を呈し、深さは28cmを測る。遺物は出土していない。
第14号土坑（第22図3・図版14-2）

D7d4グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は83×70cmを測る。底面形も楕円形を呈し、規模は75×61cmを測る。断面形はクライ状を呈し、深さは16cmを測る。礫が1出土している。

第15号土坑（第22図4・図版14-3）

E4a5グリッドに位置する。平面形は不整楕円形を呈し、規模は80×73cmを測る。底面形は楕円形を呈し、規模は52×45cmを測る。断面形は楕状を呈し、深さは37cmを測る。遺物は出土していない。

第16号土坑（第22図5・図版14-4）

E4c5グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は96×73cmを測る。底面形も楕円形を呈し、規模は73×58cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは16cmを測る。遺物は中期初頭と思われる土器片が3(41g)出土している。その他、礫が1出土している。

第18号土坑（第22図6・図版14-5）

D4c3d3グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は131×116cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は102×100cmを測る。断面形は桶状を呈し、深さは60cmを測る。礫が3出土している。本址は第1号住居址と重複し、本址の方が古い。第1号住居址の炉体土器は本址の覆土の上部に埋設されている。本址は検出された位置と形態から陥し穴の可能性が強いと思われたが、坑底からピットが検出されなかった為、陥し穴とはしなかった。

第20号土坑（第22図7・図版14-6）

D9d5e5グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は64×61cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は44×43cmを測る。断面形は桶状を呈し、深さは18cmを測る。遺物は出土していない。
第23号土坑（第23図1・図版14-7）

F7C2グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は90×84cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は68×66cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは15cmを測る。遺物は横刃型石器1、黒曜石の石鎚1、使用痕のある剝片1が出上している。

第24号土坑（第23図2・図版14-8）

F7c3グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は86×80cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は68×64cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは13cmを測る。遺物は黒端石の剥片石器1、使用痕のある剥片1が出土している。

第25号土坑（第23図3・図版15-1）

F7d4d5グリッドに位置する。第26号土坑と隣接する。平面形は不整円形を呈し、規模は107×100cmを測る。底面形は円形を呈し、規模は82×78cmを測る。断面形はタライ状を呈し、深さは26cmを測る。遺物は出土していない。

第26号土坑（第23図4・図版15-1）

F7d5グリッドに位置する。第25号土坑と隣接する。平面形は梢円形を呈し、規模は173×168cmを測る。底面形も梢円形を呈し、規模は78×58cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは23cmを測る。遺物は中期初頭の土器片が1（24g）出土している。

第29号土坑（第23図5・図版15-2）

F9e3e4グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は173×168cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は107×96cmを測る。断面形はすり鉢状を呈し、深さは102cmを測る。本遺跡の中で最大規模の土坑である。陥れ穴の可能性も考えられ、坑底を掘り下げたが、ピットは検出されなかった。遺物は出土していない。

第35号土坑（第23図6・図版15-4）

G3c5d5グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈し、規模は103×93cmを測る。底面形は円形を呈し、規模は77×75cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは18cmを測る。遺物は出土していない。

第37号土坑（第23図7）

H5b1グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は103×93cmを測る。底面形も不整形で、規模は58×54cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは10cmを測る。遺物は出土していない。

第40号土坑（第24図1・図版15-3）

H6a1グリッドに位置する。平面形は梢円形を呈し、規模は108×95cmを測る。底面形も梢円形を呈し、規模は90×79cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは12cmを測る。坑底に形状の異なる3ヶの砾（円盤状、角柱状、円柱状）が据えられている。いずれも坑底から僅かに浮いた状態にある。この他に遺物は出土していない。本址は第41号土坑と重複するが、第41号土坑はシミ状のもので、遺構であるかは不明である。これを遺構とした場合、本址の方が新しい。第41号土坑を挟んで東側に規模の小さい第42号土坑があり、本址との関連も考えられる。又第44・45号土坑と隣接する。本址は当集落の中央に位置し、注目すべき遺構である。

第42号土坑（第24図1・図版15-3）

H6b1グリッドに位置する。平面形は不整梢円形を呈し、規模は35×29cmを測る。底面形は梢

円形を呈し、規模は22×17cmを測る。断面形は楕状を呈し、深さは14cmを測る。遺物は出土していない。本址に隣接する第40、41号土坑との関連も考えられる。

第44号土坑（第24図2・図版15-5）

H6b1グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は96×96cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は84×76cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは8cmを測る。中期初頭の土器片が11（2708）出土している。

第45号土坑（第24図3）

H6a1グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は45×40cmを測る。断面形は楕状を呈し、深さは20cmを測る。第46号土坑と重複するが、第46号土坑はシミ状のもので、遺構であるかは不明である。遺物は出土していない。

第47号土坑（第24図4・図版15-6）

H6c2d2グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は73×68cmを測る。底面形は楕円形を呈し、規模は50×37cmを測る。断面形は鉢状を呈し、深さは42cmを測る。遺物は出土していない。

第52号土坑（第24図5・図版15-7）

G8e5・G9e1グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は81×80cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は60×59cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは18cmを測る。遺物は出土していない。

第53号土坑（第24図6・図版16-1）

H9a2グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は79×74cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は59×53cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは11cmを測る。遺物は出土していない。

第54号土坑（第24図7）

H4a1グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈し、規模は77×72cmを測る。底面形も不整円形を呈し、規模は54×50cmを測る。断面形は皿状（不整形）を呈し、深さは18cmを測る。遺物は出土していない。

第56号土坑（第24図8）

H3c4グリッドに位置する。平面形は不整楕円形を呈し、規模は43×35cmを測る。底面形は楕円形を呈し、規模は28×17cmを測る。断面形は楕状を呈し、深さは21cmを測る。遺物は出土していない。

第58号土坑（第24図9・図版16-2）

I3a3グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は140×122cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は112×100cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは20cmを測る。遺物は中期初頭の土器片3（678）、打製石斧1、碎片1、黒曜石の碎片・剝片2が出土している。

第63号土坑（第25図1・図版16-3）

I9c2グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は103×83cmを測る。底面形も楕円形を呈し、規模は66×45cmを測る。断面形は楕状を呈し、深さは39cmを測る。遺物は土器片が2(18g)出土している。

第66号土坑（第25図2・図版16-4）

I4c1d1グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は96×93cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は79×74cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは49cmを測る。礫が1出土している。

第67号土坑（第25図3・図版16-5）

J3c2グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は92×85cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は75×65cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは14cmを測る。遺物は出土していない。

第69号土坑（第25図4・図版16-6）

J5b2b3グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は102×90cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は85×75cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは13cmを測る。遺物は中期初頭の小型半完形土器が出土している。

第77号土坑（第25図5）

J2b5グリッドに位置する。平面形は隅丸方形を呈し、規模は36×36cmを測る。断面形は不整形で、深さは27cmを測る。遺物は出土していない。

第78号土坑（第25図6）

J2c5グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は123×39cmを測る。断面形は不整形で、深さは30cmを測る。2基の重複の可能性も考えられるが判然としない。遺物は中期初頭の土器片が1(10g)出土している。その他、礫が1出土している。

第82号土坑（第25図7・図版16-7）

K5c2c3グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は94×92cmを測る。底面形も不整形で、規模は82×78cmを測る。断面形は不整形（皿状）で、深さは15cmを測る。遺物は出土していない。

第90号土坑（第25図8・図版16-8）

K3c2グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は90×80cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は78×67cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは17cmを測る。遺物は出土していない。

第91号土坑（第25図9・図版17-1）

K4e4e5グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は77×74cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は65×60cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは11cmを測る。遺物は出土していない。

第102号土坑（第25図10・図版17-3）

L7d5グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は123×112cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は103×95cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは31cmを測る。遺物は中期初頭の土器片が4(79g)、打製石斧1、碎片1が出土している。その他、礫が2出土している。

第104号土坑（第26図1・図版17-2）

L3b3c3グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は76×69cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は61×58cmを測る。断面形は不整形（皿状）で、深さは19cmを測る。遺物は出土していない。

第105号土坑（第26図2）

L4d2グリッドに位置する。平面形は不整楕円形を呈し、規模は142×107cmを測る。底面形は楕円形を呈し、規模は92×63cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは34cmを測る。遺物は出土していない。

第108号土坑（第26図3）

M7c4グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈し、規模は105×105cmを測る。底面形も不整円形を呈し、規模は90×85cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは17cmを測る。遺物は出土していない。

第109号土坑（第26図4・図版17-5）

N6d4d5グリッドに位置する。平面形は不整楕円形を呈し、規模は207×148cmを測る。底面形も不整楕円形を呈し、規模は156×110cmを測る。断面形は不整形で、深さは50cmを測る。本遺跡の中で規模の大きい土坑である。遺物は出土していない。

第110号土坑（第26図5・図版17-4）

O3a1グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は91×89cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は84×79cmを測る。断面形は楕状を呈し、深さは42cmを測る。遺物は磨製石斧が1出土している。その他、礫が2出土している。本址は第111号土坑と隣接する。

第111号土坑（第26図6・図版17-4）

O5a5・O3a1グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は110×108cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は90×89cmを測る。断面形はタライ状を呈し、深さは30cmを測る。遺物は中期初頭の小型の半完形土器が出土している。本址は第110号土坑と隣接する。

第112号土坑（第26図7）

N5b4c4グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈し、規模は100×86cmを測る。底面形は円形を呈し、規模は76×64cmを測る。断面形はタライ状を呈し、深さは23cmを測る。遺物は出土していない。

第113号土坑（第26図8・図版17-6）

M3e5・M4e1グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈し、規模は69×58cmを測る。底面形も不整円形を呈し、規模は52×43cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは17cmを測る。両側の張り出しがシミ状のもので、性格が判然としない。別の土坑の重複とみた場合、本址の方が新しい。遺物は出土していない。

第114号土坑（第27図1・図版18-1）

N4b1グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈し、規模は75×72cmを測る。底面形も不整

円形を呈し、規模は58×57cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは14cmを測る。遺物は横刃型石器が1出土している。その他、礫が1出土している。第115号土坑と隣接する。

第115号土坑（第27図2・図版18-2）

N4b1グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は61×56cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は42×40cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは10cmを測る。遺物は出土していない。第114号土坑と隣接する。

第116号土坑（第27図3・図版18-4）

N4d1グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は76×72cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は57×50cmを測る。断面形は桶状を呈し、深さは24cmを測る。遺物は中期初頭の土器片が1（7g）出土している。その他、礫が1出土している。

第117号土坑（第27図4・図版18-3）

N3a3a4グリッドに位置する。平面形は不整楕円形を呈し、規模は135×108cmを測る。底面形も不整楕円形を呈し、規模は110×83cmを測る。断面形はタライ状を呈し、深さは27cmを測る。遺物は中期初頭の土器片12（235g）、打製石斧2、黒曜石の剥片石器1、使用痕のある剥片1が出土している。

第119号土坑（第27図5）

O3b4b5グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は92×70cmを測る。底面形も楕円形を呈し、規模は74×56cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは18cmを測る。遺物は出土していない。

第122号土坑（第28・29図・図版19-12）

O3c3c4d3d4グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は130×121cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は122×120cmを測る。断面形は底部に向けてやや広がる傾向をもつ巾着型を呈し、深さは58cmを測る。本址は遺跡内の土坑で最もしっかりした壌方がなされ、圧倒的に多い量の遺物が出土している。土器は中期初頭の半完形土器3を含め計73（3,336g）の破片が出土しているが、完形となるものはない。石器は打製石斧1、碎片2、凹石1、抉入石器1、黒曜石のものが剥片石器1、ビエス・エスキュー1、碎片1、剥片2出土している。これらの遺物は覆土の上部から中部にかけて出土する一群と、底部から10cm前後浮いて出土する一群に分かれる様に観察された。前者は第1層、後者は第4層を主として出土している。しかし、出土した遺物間に時間的な差異を見出すのは難しく、土坑中に新たな掘込みがあったとは思われなかった。本址が本来有していた機能は貯蔵穴と考えている。この出土の様相は、貯蔵穴としての機能消失後に捨場として利用された結果ではないかと考えている。本址を挟んで二つの小土坑、第129・146号土坑が対し、本址との関連が考えられる。第129号土坑の覆土はシミ状の褐色土の單一層で、落ち込み不明瞭、形状も不整形である。これより中期初頭の土器片（第29図20・21）が4（88g）出土している。第146号土坑の覆土は黒褐色土の單一層で、落ち込みも割合はっきりしており、柱

穴状を呈している。

第123号土坑（第30図1・図版18-5）

O3e3e4グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は91×85cmを測る。底面形も円形を呈し、規模は69×66cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは17cmを測る。遺物は出土していない。

第127号土坑（第30図2・図版18-6）

O5a3a4グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は130×67cmを測る。底面形も隅丸長方形を呈し、規模は110×60cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは24cmを測る。遺物は中期初頭と思われる土器片が1（10g）出土している。その他、礫が4出土している。本址の検出は非常に明瞭で、覆土-黒色土（ローム塊を多量に含む）の單一層-が切り込む様であり他と異なる。本遺跡では類似する形態の土坑は検出されない。

第128号土坑（第30図3・図版18-7）

M3d2e2グリッドに位置する。平面形は隅丸方形を呈し、規模は80×68cmを測る。底面形も隅丸方形を呈し、規模は66×52cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは13cmを測る。遺物は中期初頭の土器片1（8g）、黒曜石の碎片・剥片1が出土している。

第130号土坑（第30図4・図版19-3）

O4a3グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は37×35cmを測る。断面形は筒状を呈し、深さは53cmを測る。柱穴状の土坑である。遺物は出土していない。土坑番号を付したものには、本址以外にも柱穴状のものがみられたが、不整形で植物による搅乱の可能性が高いと思われた。本址は落ち込みがしっかりとしていたため、遺構とした。

第145号土坑（第30図5・図版19-4）

G2b5グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈し、規模は97×89cmを測る。底面形も不整円形を呈し、規模は77×69cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは24cmを測る。中期初頭と思われる土器片が5（15g）出土している。

(3)集 石

礫の集中が2箇所にみられた。集石遺構として本節で報告する。

第1号集石（第31図1・図版20-1）

D1d1e1グリッドに位置する。ローム漸移層の下部で検出されている。47ヶの礫によって構成され、95×55cm程の楕円形を呈している。構成する礫にはほとんど高低差がなく、ほぼ水平である。礫は拳大から人頭大程の直角礫で、この中には赤色のものもみられ、加熱を受けた痕と思われる。集石は炭化物を僅かに含む黒褐色土（第1層）内にある。周辺のローム漸移層には微小な炭化物が観察されたが、堀方は検出されなかった。しかし、遺構検出面から察すると、ローム漸移層中に埋り込まれ、構築された可能性が高い。伴出した遺物はない。

第2号集石（第31図2・図版20-2）

D4b4c4グリッドに位置する。7号土坑（陥し穴）の覆土上部から第1層を中心として検出されている。本址は7号土坑の埋没過程（自然堆積と思われる）でつくられたものである。39ヶの礫によって構成され、90×50cm程の楕円形を呈している。構成する礫には高低差がみられる。礫は拳大から人頭大程の亜角礫で、この中には赤色のものもみられ、加熱を受けた痕と思われる。

本址は、7号土坑の埋没過程で生じた堆积に、礫を廃棄したものとも考えられるが、第1号集石と平面の形状と規模、及び礫の特徴が類似することから、本址も意図をもってつくられたものと判断したい。但し、構成する礫に高低差がある点で第1号集石と異なる。

遺物は第7号土坑覆土から出土している土器片5（格状体压痕文土器1、織維土器2、中期初頭と思われるもの2）が本址に関連する可能性があるが、本址との関連については判然としない。

（4）ロームマウンド（図版21・22・23）

ロームマウンドは11基検出されている。遺物を出土したロームマウンドは第1号、第4号、第8号ロームマウンドの3基である。第1号からは黒曜石の碎片・剝片が3出土している。第4号からは織文土器片（中期初頭と思われる）が3（7枚）、黒曜石の碎片・剝片が3出土している。第8号からは打製石斧1、碎片1が出土している。

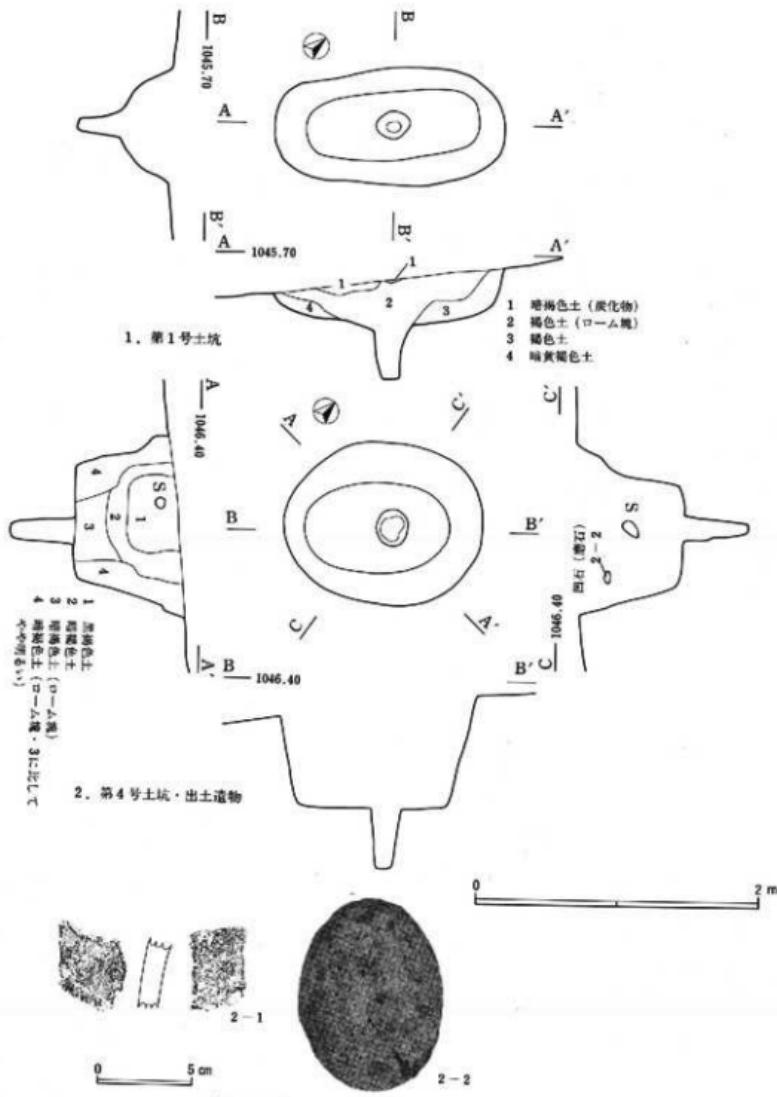
（5）遺構外出土の遺物

土器（第32図1～8・図版26-4）

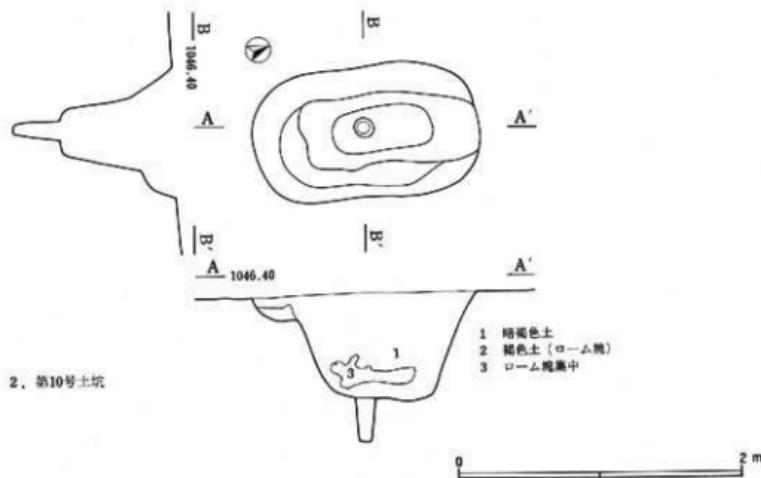
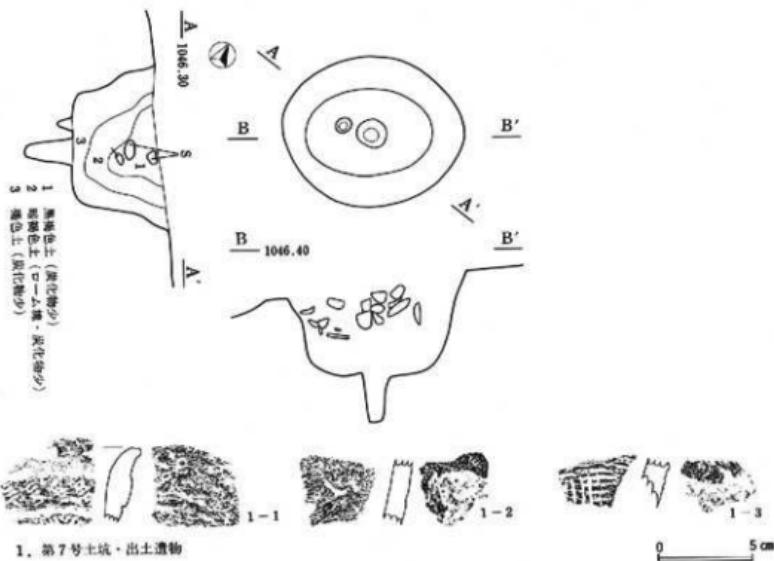
本遺跡の主体を占める中期初頭の土器の他に、早期末に位置づけられる土器が表面採集されている。1・2は条痕文系土器である。1は野島式あるいは鶴ヶ島台式に比定されようか。3・4は格条体压痕文土器、5・6は撚糸文土器、7・8は無文の織維土器である。

石器（第32図9～20）

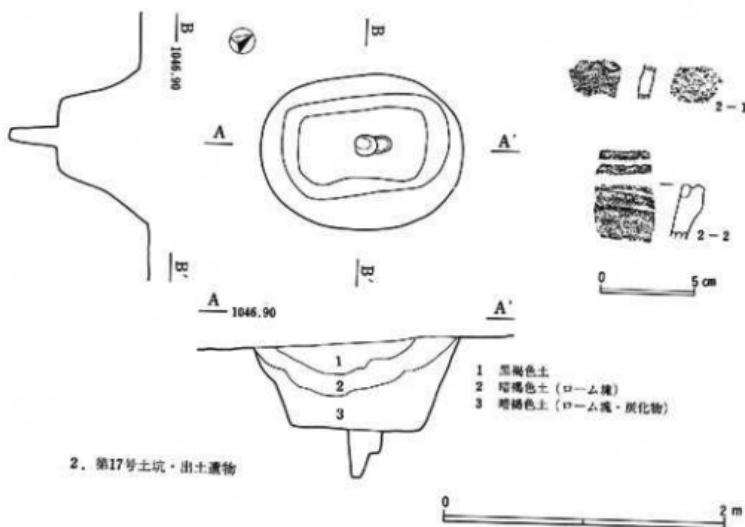
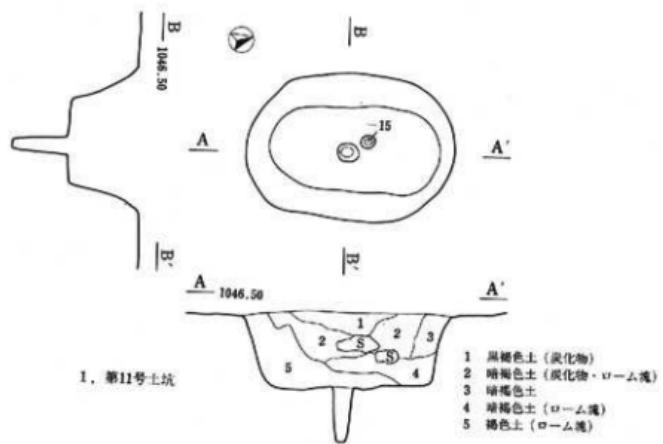
表面採集された石器には打製石斧（9～16）、凹石（17）、石錐（18）、石鎌（19・20）等がある。



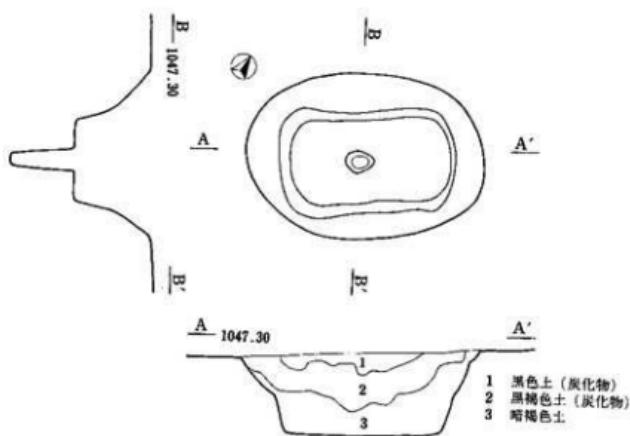
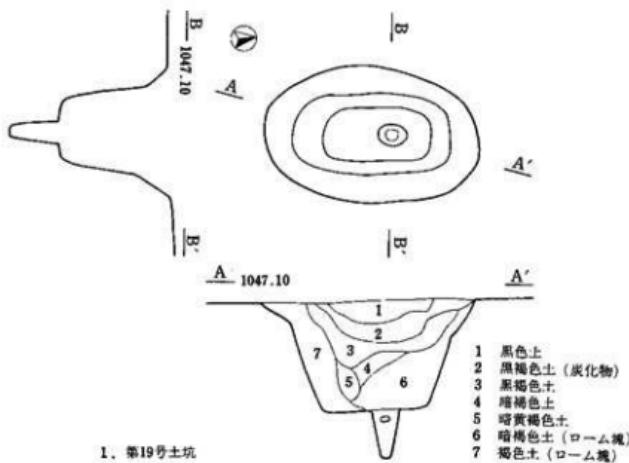
第14図 第1・4号土坑 (1/40), 出土遺物 (1/3)



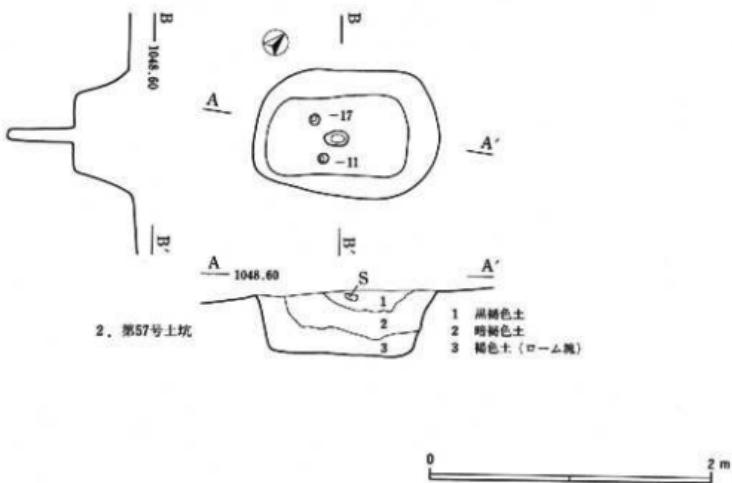
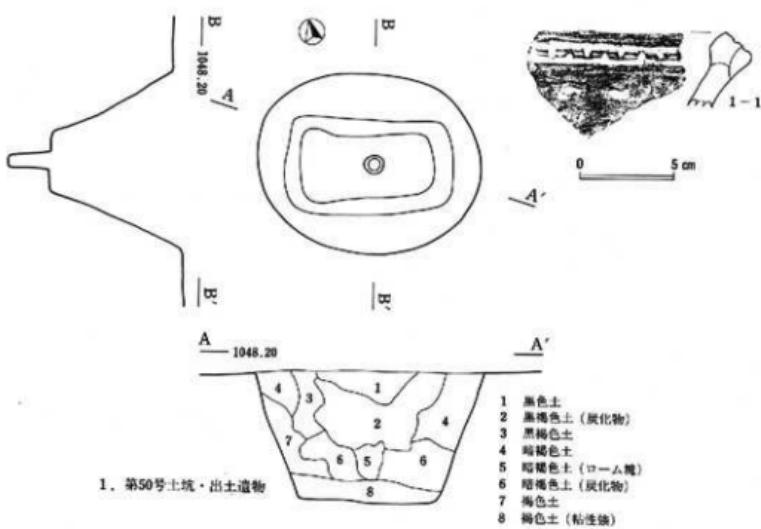
第17図 第7・10号土坑 (1/40), 出土遺物 (1/3)



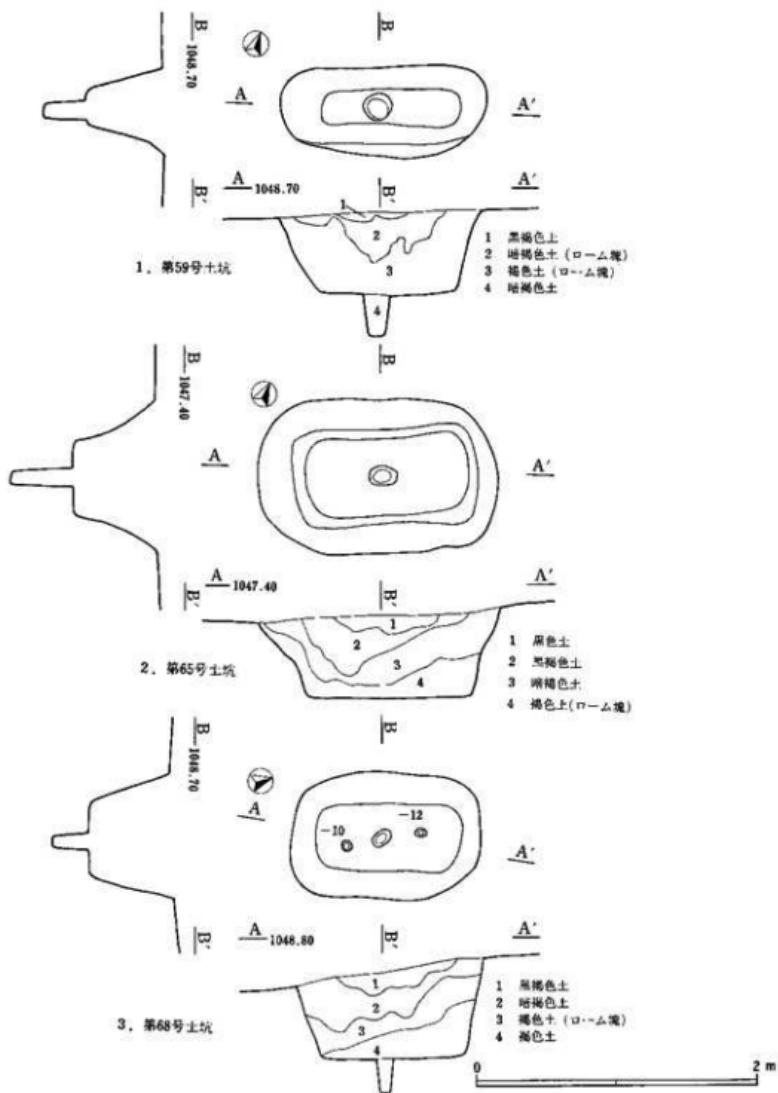
第18図 第11・17号土坑 (1/40), 出土遺物 (1/3)



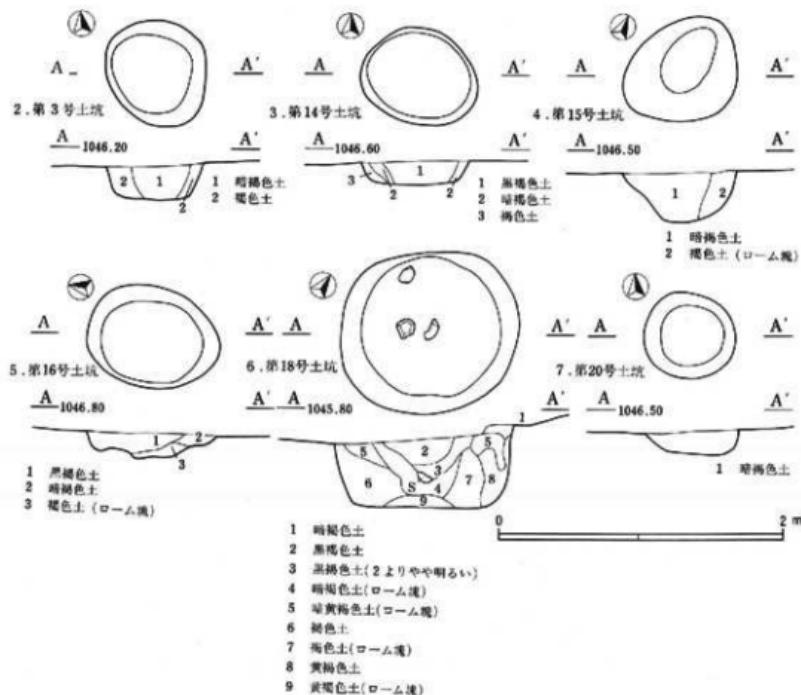
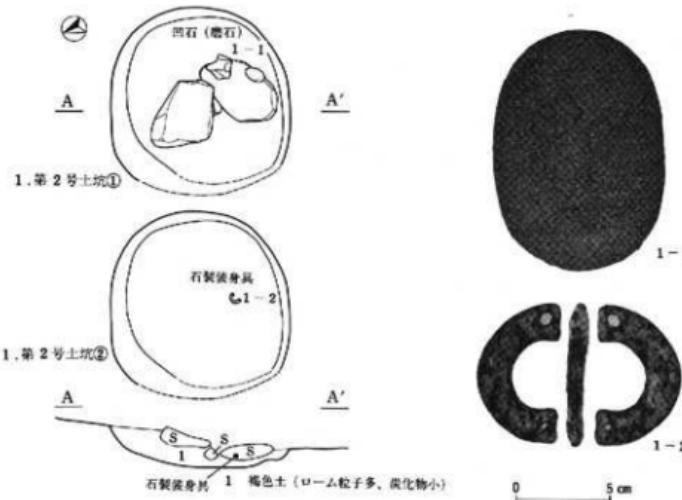
第19图 第19·30号土坑 (1/40)



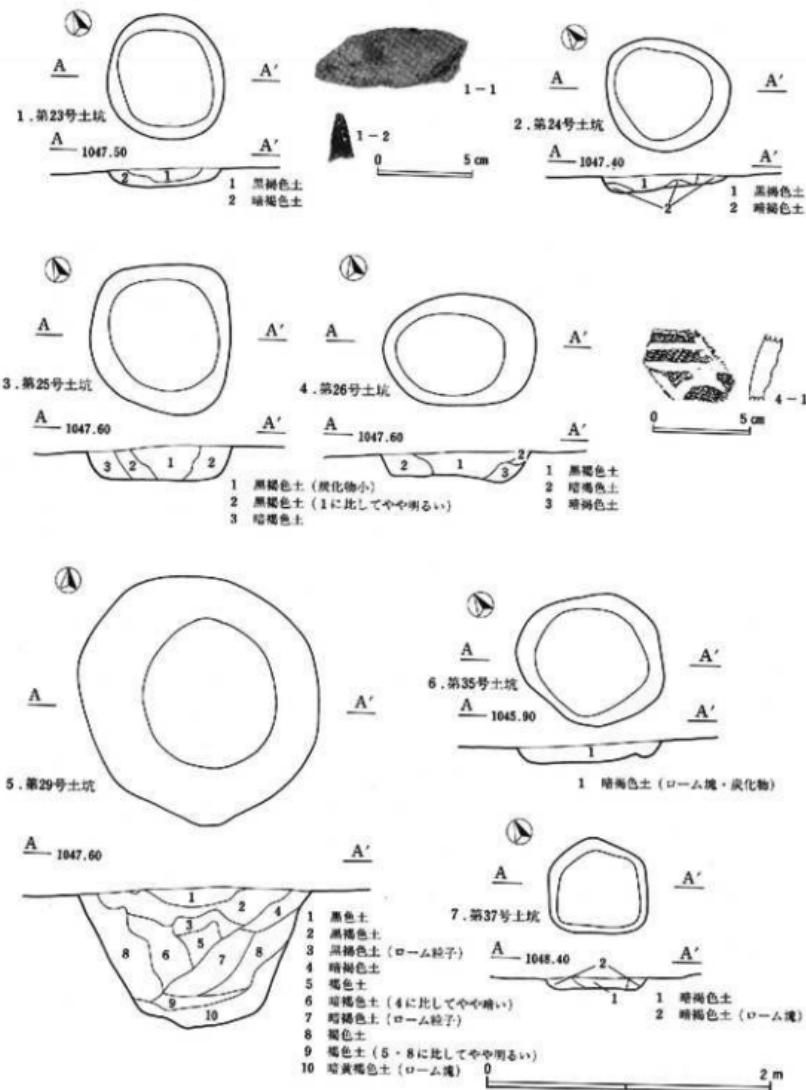
第20図 第50・57号土坑(1/40), 出土遺物(1/3)



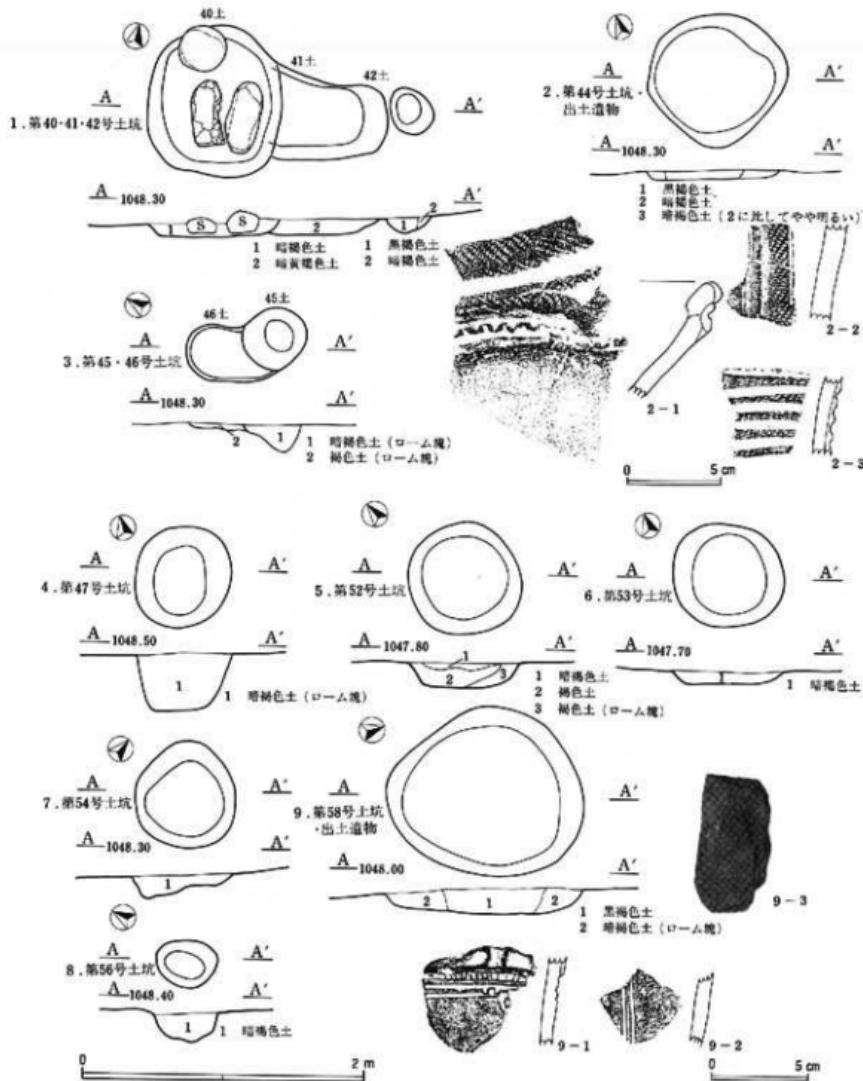
第21圖 第59·65·68號I·坑 (1/40)



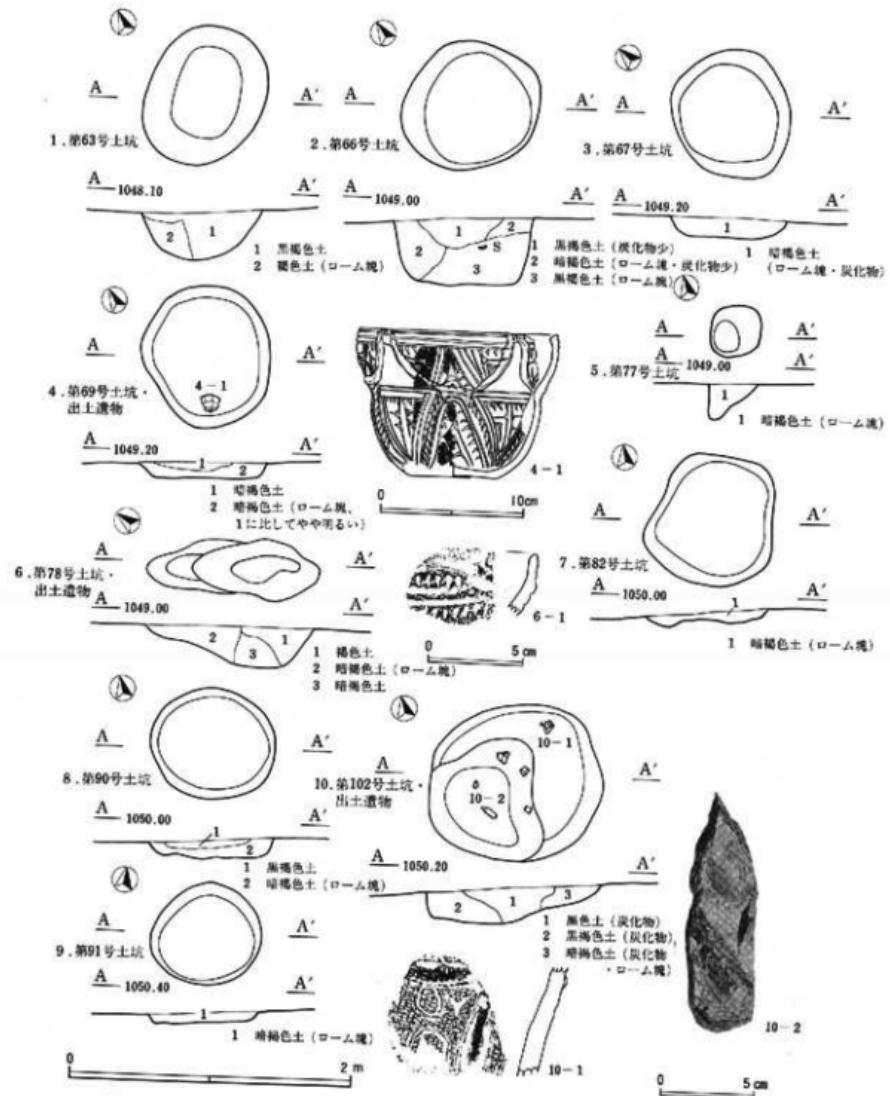
第22図 第2・3・14・15・16・18・20号土坑 (1/40), 出土遺物 (1/3)



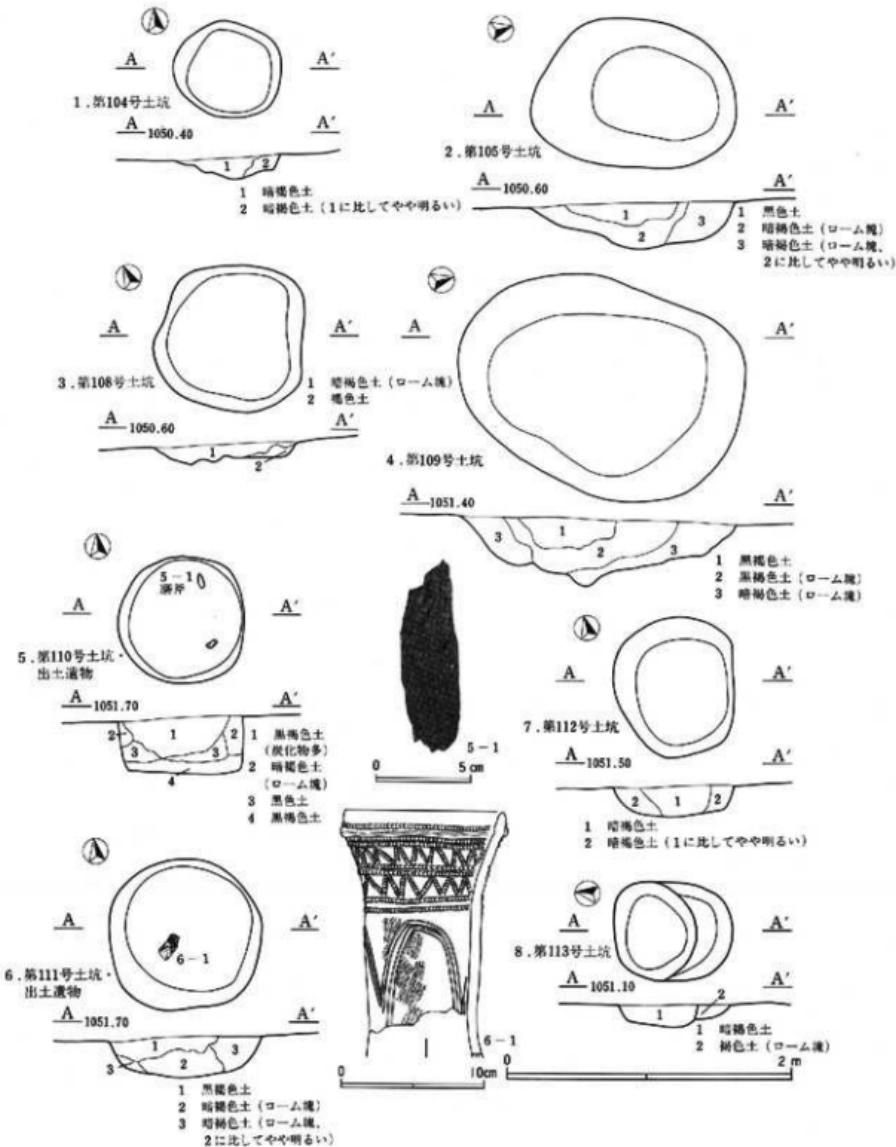
第23図 第23・24・25・26・29・35・37号土坑 (1/40), 出土遺物 (1/3)



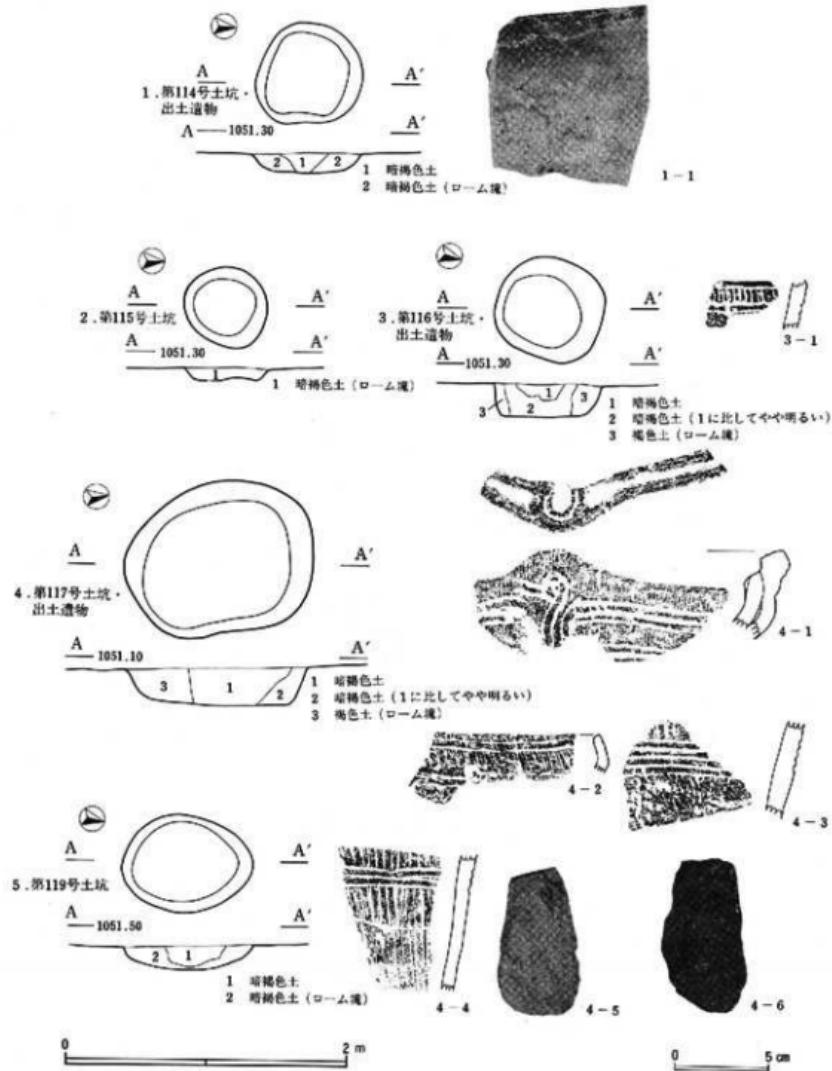
第24図 第40・41・42・44・45・46・47・52・53・54・56・58号土坑 (1/40), 出土遺物 (1/3)



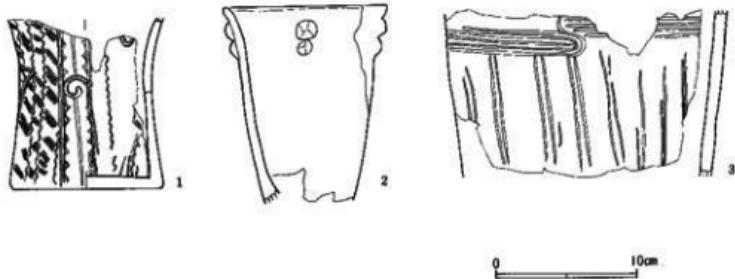
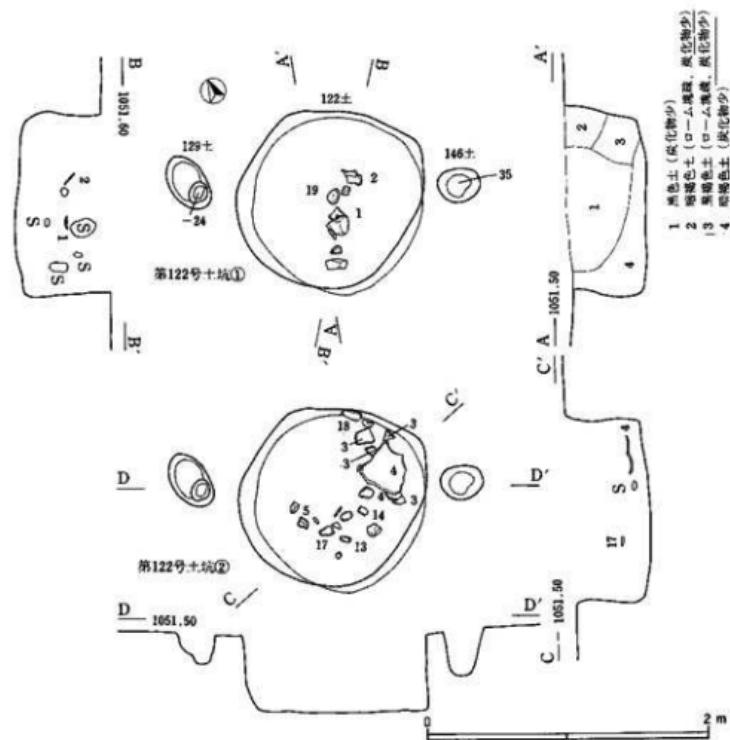
第25図 第63-66-67-69-77-78-82-90-91-102号土坑 (1/40), 出土遺物 (1/3, 4-1 (1/4))



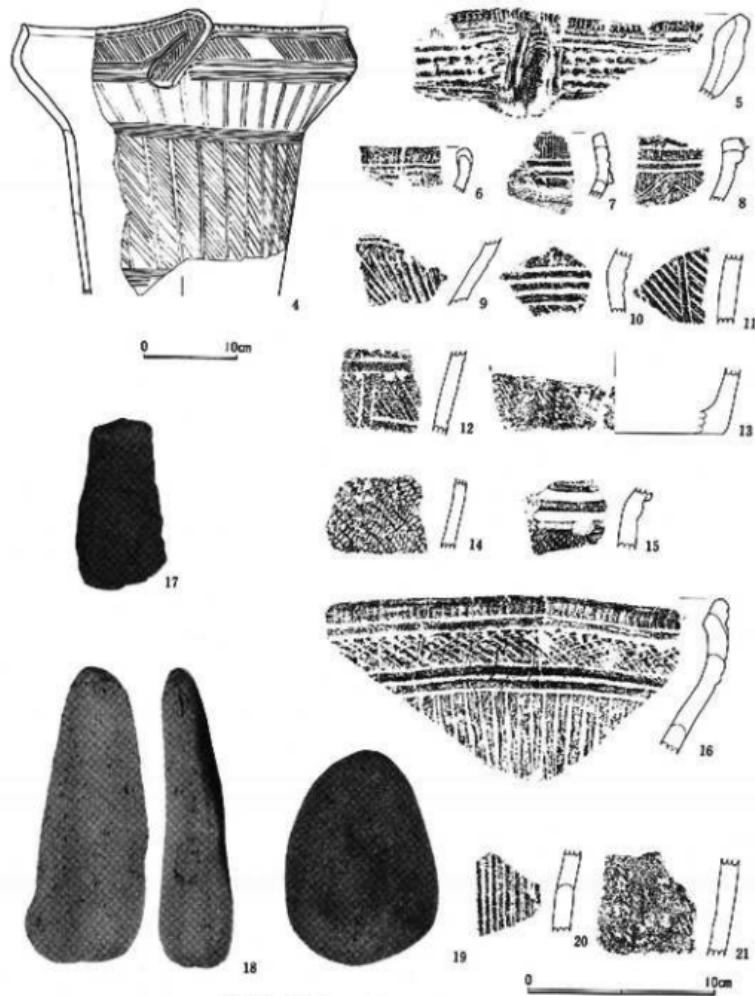
第26図 第104-105-108-109-110-111-112-113号土坑 (1/40), 出土遺物 (5-1は1/3, 6-1は1/4)



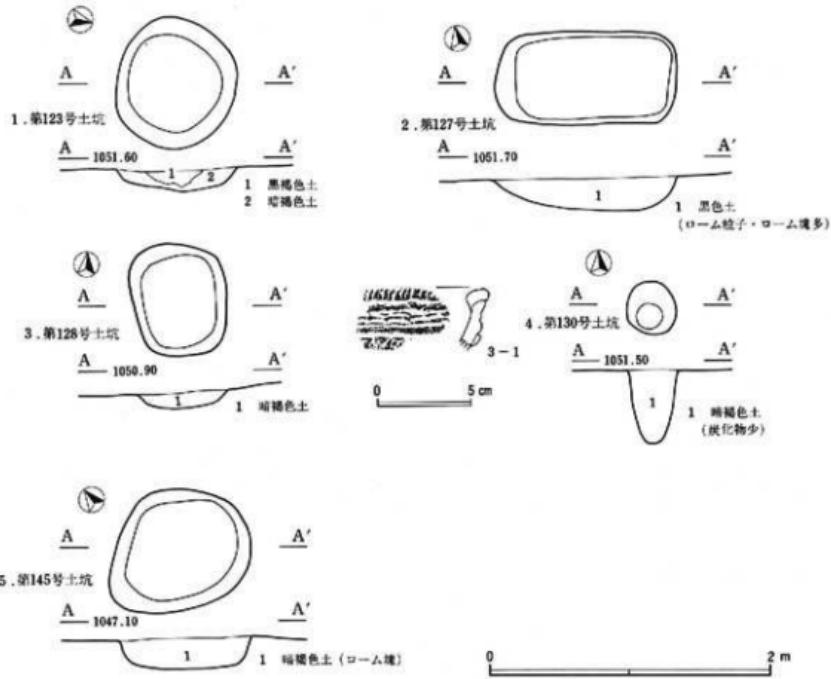
第27図 第114・115・116・117・119号土坑 (1/40), 出土遺物 (1/3)



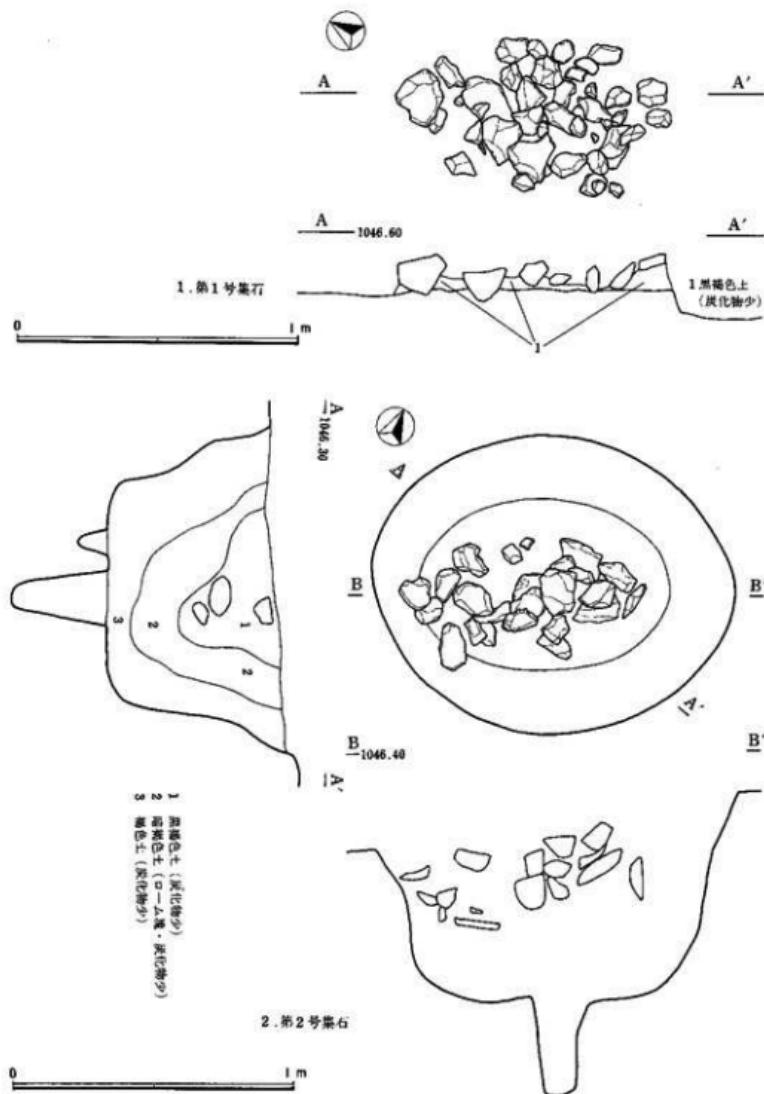
第28図 第122号土坑(1/40), 出土遺物(1/4)



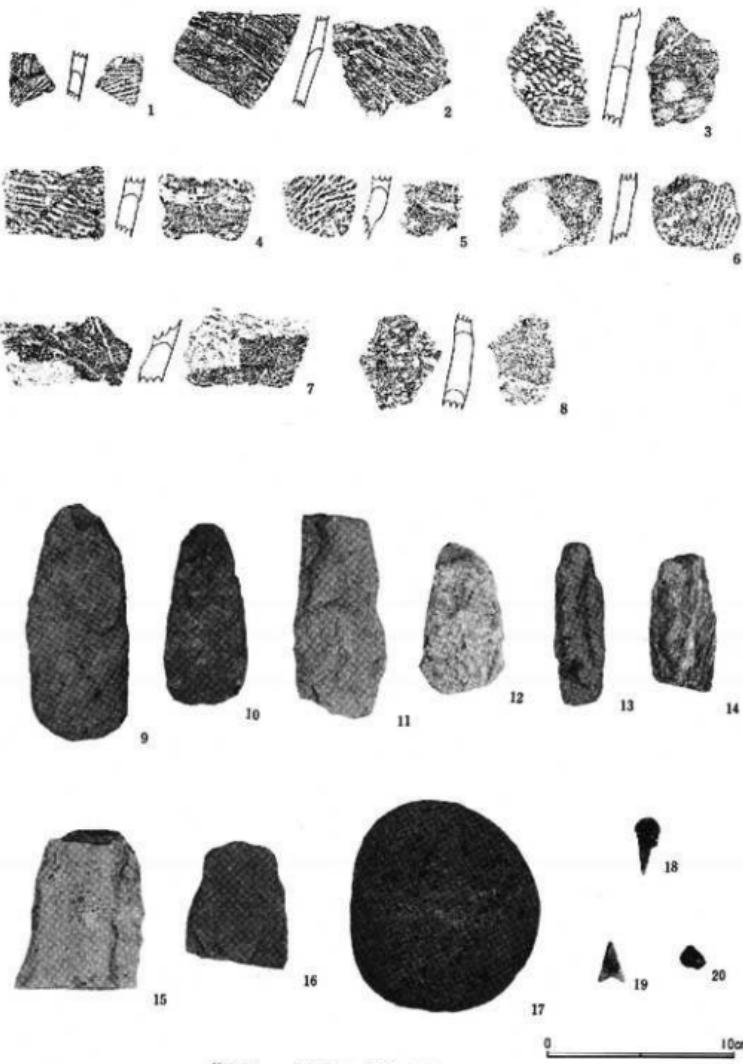
第29圖 第122·129號土坑出土遺物 (1/3, 4:31/6)



第30図 第123・127・128・130・145号土坑 (1/40), 出土遺物 (1/3)



第31図 集石 (1/20)



第32図 遺構外の遺物 (1/3)

出土遺物一覽表

機 械	石 破										磨 磨 石		其 の 他	
	打斧	断斧	鎌刃	鎌刃	新片	凹石	凹石 (鏡)	被打	石墨	鉄片	石墨 アラカホ精 アラカホ精	() 内付鐵及び鐵定時期	角柱状錐 1 , 鋼 5 錐 1	
第 1 号 住居社		1	1						1	1				
第 2 号 住居社						1	1	1	4	1	2			
第 3 号 住居社	1					3	2	5	2	4	7	1	内付錐 1 , 鋼 5 錐 1	
第 4 号 住居社	3	2	1			11	2	1	1	4	34	1	内付錐 1 , 鋼 5 錐 1	
第 5 号 住居社	11	1	1										内付錐 1 , 鋼 5 錐 1	
第 6 号 住居社														
第 7 号 住居社	5					1	1		4	4	4	2	内付錐 1 , 鋼 5 錐 4	
第 8 号 住居社									1	1	13	1	内付錐 1 , 鋼 5 錐 4	
第 9 号 住居社											1	1	内付錐 1 , 鋼 5 錐 4	
小計	27	20	2	2	15	5	2	7	2	6	20	10	内付錐 1 , 鋼 5 錐 2	
第 4 号 土机(錐し穴)									1					
第 7 号 土机(錐し穴)														
第 10号 土机(錐し穴)										1				
第 17号 土机(錐し穴)														
第 50号 土机(錐し穴)														
第 2 号 土机									1					
第 16 号 上机														
第 23 号 土机								1						
第 24 号 土机										1				
第 26 号 土机											1			
第 40 号 上机														
第 44 号 土机														
第 58 号 土机	1											2	内付錐 1 , 鋼 5 錐 1	
第 63 号 土机												1	内付錐 1 , 鋼 5 錐 1	

出土遺物一覧表

測 標	打拂 土 壤	擦拭 土 壤	石 片	石 破	鉋片 砂岩	凹石 (陶)	石 壓	鉋片 石器	石 鏊	鉋片 骨角	石 鏊	鉋片 骨角	鐵頭 アラミス頭	上器			そ の 他		
														縦	横	縦	横		
第 69 号 土 壤																			
第 78 号 土 壽																			
第 102 号 土 壽	1																		
第 110 号 土 壽	1																		
第 111 号 土 壽																			
第 114 号 土 泥		1																	
第 116 号 土 泥																			
第 117 号 土 泥	2																		
第 122 号 土 泥	1																		
第 127 号 土 泥																			
第 128 号 土 泥																			
第 129 号 土 泥																			
第 145 号 土 泥																			
小																			
新1号ロームマウンド																			
新4号ロームマウンド																			
新8号ロームマウンド	1																		
小	計	1																	
合	計	26	3	4	2	20	5	3	9	2	2	7	23	11	105	1	9		

第V章 ま と め

本遺跡は、住居址、陥し穴、土坑、集石より構成される。調査の結果、これ等の遺構は縄文時代早期末に帰属すると考えられるものと、縄文中期初頭に帰属するもの、大きく2時期に区分される。早期末に帰属すると考えられるものが、陥し穴と集石、及び第2号土坑である。縄文中期初頭に至り、竪穴住居址と土坑により集落が形成される。本章では早期末と考えられる遺構、縄文中期初頭の集落の順に、若干の考察と問題点を述べる。

1 縄文早期末と考えられる遺構

本遺跡からは条痕文系土器、縦条体圧痕文土器等が表面採集されており、縄文時代にみられる痕跡は早期末に遡る。遺構では陥し穴と集石及び第2号土坑がこの期に形成されたものと思われた。

(1)陥し穴

陥し穴としたものは第1・4・7・10・11・17・19・30・50・57・59・65・68号土坑の13基である。このうち3基の陥し穴から早期末の遺物が出土している。第4号土坑からは織維土器が、第7号土坑からは縦条体圧痕文土器と織維土器が、第17号土坑からは織維土器が出土している。第7・17・50号土坑からは中期初頭と思われる土器片も出土しているが、縄文中期初頭の集落と時期を接して存在していたとは考えにくい。早期末の遺物が出土した遺構はこの陥し穴に限られている。やはり、この結果から早期末に形成されたものと解釈したい。また、第18号土坑は坑底にピットが検出されなかったため、陥し穴とは断定しなかったが検出された位置、形態、規模から陥し穴の可能性を残している。これを陥し穴と考えた場合、第18号土坑は第1号住居址より古いことが確認されているため、縄文中期初頭の集落成立以前に形成されたものとだけは言える。

第50号土坑を除く12基の陥し穴は台地の南側肩部に重複することなく位置している。縄文早期末に形成されたと推測した陥し穴であるが、形態的に差異があり、一定の間隔を保っているともいえず、一概に全てが同時存在し機能していたとは判断できない。

(2)集石

集石は台地南側肩部から隣接して2基検出されている。それぞれには構成される礫の高低差の有無で異なるが、平面の形状及び規模、構成する礫の形状と加熱を受けたと見られる点等の特徴に共通性がみられる。このことから、2基の集石は同種の性格を有する遺構と考えている。第2号集石は自然埋没とみられる陥し穴（第7号土坑）上部で検出されている。陥し穴の覆土に集石に伴う壙方は検出されなかったが、陥し穴の廃絶以降に構築されたことは判明している。具体的な時期を推定する資料としては、第7号土坑出土の早期末の土器片、中期初頭の土器片が本址に伴う可能性がある。現在、集石が加熱を受けたとみられる点と、他の類例から早期末に形成された集

石炉ではないかと考えている。

(3) 第2号土坑

石製装身具が出土した第2号土坑は、台地南側肩部の早期末の痕跡の色彩が強い場所に位置する。本址からは時期決定資料を得られていないが、石製装身具は、早期末に出現するとされる円孔の大きい块状耳飾り、または石製腕飾りに類似するとみている。他の類例との比較検討を要するが、この時期の所産と考えている。

2 繩文中期初頭の集落

縩文早期末に展開された活動の後、長い空白期間を経て縩文中期初頭に至り、集落が形成される。中期初頭の遺構は、竪穴住居址と土坑である。この時期も得られた土器の様相より、二時期に分離が可能である。中期初頭第1期、第2期に区分して報告する。

(1) 中期初頭第1期

遺跡の東側に分布する第111・117・122号土坑から出土した土器は、住居址より得られている土器よりも、古い段階の様相を示している。中期初頭には居住遺構に先立ち、まず土坑が構築された。これらの土坑は掘込みも深く、しっかりととした構造をもっている。第122号土坑は本遺跡の土坑の中で遺物の出土量が圧倒的に多い。土坑の用途として貯蔵穴を考えている。

(2) 中期初頭第2期

本遺跡で居住遺構が現れ、集落が形成される。9軒の住居が重複することなく単独で、台地の幅が最も広くなる場所を中心とし、楕円形に非常に閑散と展開している。

住居は炉形態により二分される。炉形態には埋甕炉と地床炉がある。埋甕炉の住居址は、第1・2・3・8号の4軒である。この住居址の特徴に、出土する遺物の量が非常に少ないことが指摘できる。それは炉体土器のみを残して廃棄されたともいえるような様相である。埋甕炉にはその壠方と炉体土器内部にはほとんど焼土が観察されず、周辺の床面は焼けていないことが共通している。

地床炉の住居は第4・5・6・7・9号の5軒である。地床炉の中央部、即ち焼土範囲の真ん中には5基とともに掘り込みがみられた(但し、第9号住居址の炉については不確定部分がある)。この堀り込みは炉体土器の埋設痕とも考えられる。地床炉としたものも使用時には七器が埋設されていたのであろうか。しかし、これを想定した場合にも、上記の埋甕炉とでは使用方法に違いがあったであろう。なぜならば、埋甕炉からは僅かな焼土が検出されるのみで、炉体土器周辺はまったく焼けていないからである。

地床炉の第4・5・7号の3軒の住居址では、覆土中に焼土、炭化物、炭化材が他よりも多く検出された。いずれも住居自体に火傷がみられず、これが火災を受けた結果とは思われなかった。住居の廃絶後にある程度埋まつた段階で、火の使用がなされたか、これが廃棄された結果であると考えている。この3軒が他の住居址に比べて、遺物の出土量が多いことも指摘できる。遺存状

態を考慮しなければならないとはい、極端に言えば、この3軒の住居址以外は生活用具を残していない。この現象をいかに解釈するべきであろうか、炉形態との因果関係があるものであろうか、問題が残されている。

埋甕炉と地床炉という炉形態の違いから住居址の分布をみた場合、埋甕炉の住居址が集落西側と南側の外帯にあり、東側にスライドしてこの内帯に地床炉の住居址が位置することが指摘できる。

炉形態の差異によって以上の共通性を見出した。これが住居のもの機能の差によるものなのか、時間的な差によるものなのか今後の検討を要する。この問題が当集落の形成、構造の把握に決定的に重要と考えている。炉体土器と出土土器の詳細な検証を重ねたい。

第1・4・5号の3軒の住居址では、南部から南東部の壁沿いで、大型の柱状礫が出土している。これ等については、第1号住居址のものは角柱状礫、第4号住居址のものは四角錐状礫、第5号住居址のものは円柱状礫として記述している。礫の形状は異なるが、住居址空間に占める位置が共通しており、意識的に配されたものと思われる。第4号住居址のそれは、あたかも立てられていたかのように、斜状に遺存していた。この他には、これ等の礫が石柱として建てられていたとみる積極的な痕跡は得られていないが、屋内祭祀に係わる施設ではないかと考えている。長野県原村の大石遺跡では同様な例が中期中葉に見られ、石柱による屋内祭祀の始まりを葬沢期と推論している。本遺跡の例は、この屋内祭祀の初現を考える上で重要であろう。

土偶が出土した第7号住居址は集落の東端の住居址である。この住居址は他の住居址に比べ大きく、深く堀り込まれている。また、数回にわたる改築が認められ、他より長期に亘り営まれたことが考えられる。集落の中で特別な役割を担っていたものであろう。

この期に属すると考えられる土坑は断面皿状もしくはタライ状の比較的浅いものが主体を占める。遺物が出土しないものが多く、遺物を出土するものも出土量はどれも非常に貧弱なものであり、用途を推定しうるもののがほとんどない。分布は集落の中央部に分布するものは少なく、これをとり巻く様に位置している。住居址同様に散発的な分布ではあるが、ある程度まとまる傾向にある。第40号土坑は集落の中央に位置する注目すべき遺構である。形状の異なる3つの礫が浅い土坑の坑底に据えられている。第1・4・5号の3軒の住居址から出土した礫については屋内祭祀に係わる施設と推定したが、本址は屋外祭祀に係わる遺構と捉えられないであろうか。第40号土坑から出土した角柱状礫は第1号住居址の礫と、円柱状礫は第5号住居址の礫と類似する。

3 おわりに

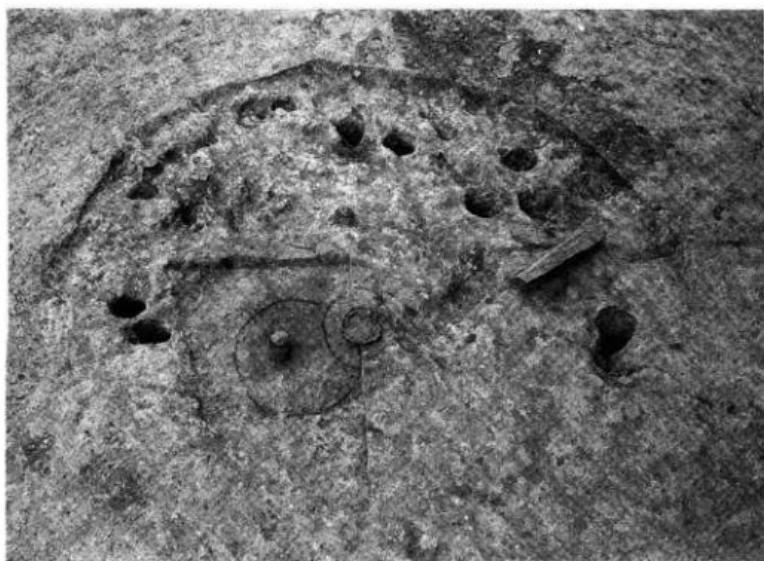
今回の報告では、遺構、遺物とも充分な分析をなしえず、紹介するに止まった。本遺跡の主体を占め、注目すべき中期初頭の土器についても同様である。本遺跡が中期初頭の単純集落であればこそ、この土器の分類は、遺跡構造の把握に不可欠であると認識している。今後の課題として研究していきたい。また、ここ数年の発掘調査により、本遺跡の位置する地域一帯には縄文中期

初頭の遺跡が集中することが判明している。より広い視野に立って考察し直さなければならないだろう。今回の報告は、現場で得られた所見、問題を提起したにすぎず、再考するつもりである。

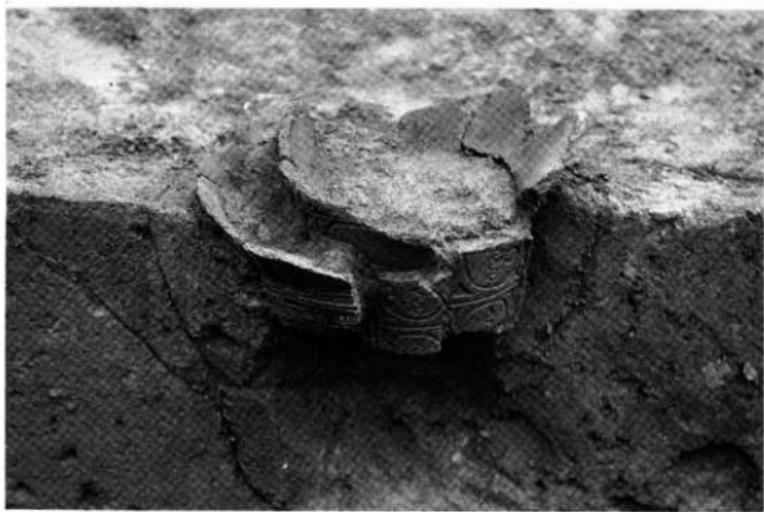
参考文献

- 茅野市教育委員会 1986 『茅野市史 上巻 原始古代』
茅野市教育委員会 1990 『柳畠遺跡』
茅野市教育委員会 1991 『上見遺跡』
茅野市教育委員会 1992 『中原遺跡』
茅野市教育委員会 1992 『鴨田遺跡』
茅野市教育委員会 1993 『稗田頭A遺跡』
茅野市教育委員会 1993 『天狗山遺跡』
茅野市教育委員会 1993 『中ツ原遺跡』
岡谷市教育委員会 1974 『扇平遺跡』
岡谷市教育委員会 1985 『梨久保遺跡』
長野県教育委員会 1976 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市・原村その1 富士見その2— 昭和50年度』
三上徹也 1987 「梨久保式土器 再考」『長野県埋蔵文化財センター 紀要1』長野県埋蔵文化センタ
ー
小林康男 「出土土偶」『季刊考古学 第30号 一過文土偶の世界』雄山閣

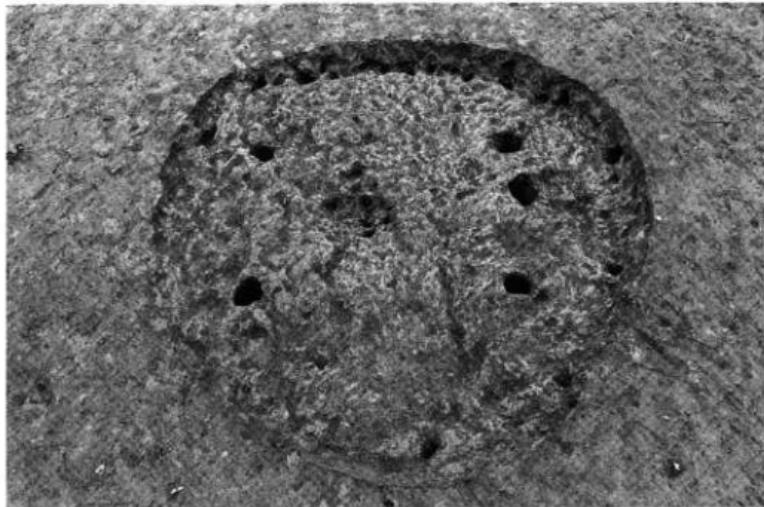
図 版



1 第1号住居址



2 第1号住居址炉体土器埋設状態



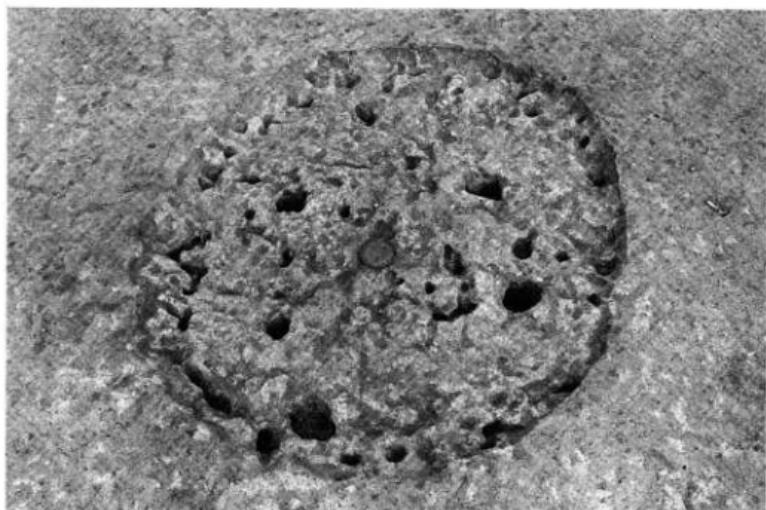
1 第2号住居址（炉体土器取上後）



2 第2号住居址炉体土器



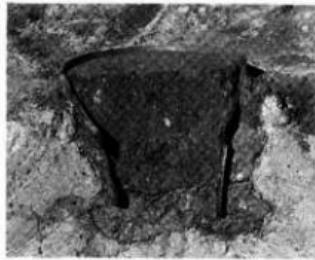
3 第2号住居址炉体土器断面



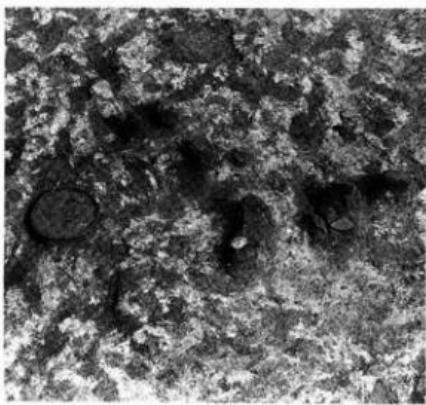
1 第3号住居址



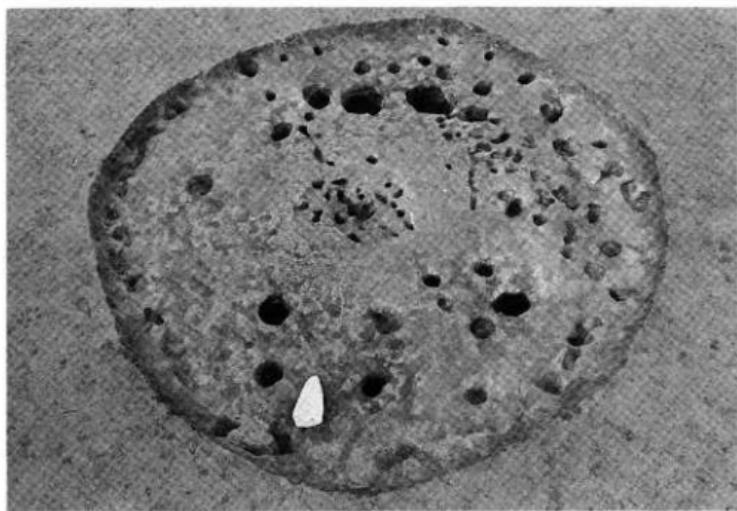
2 第3号住居址炉体土器



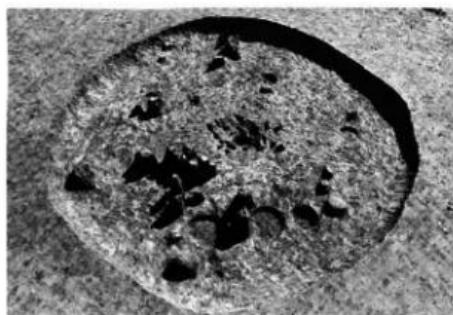
3 第3号住居址炉体土器断面



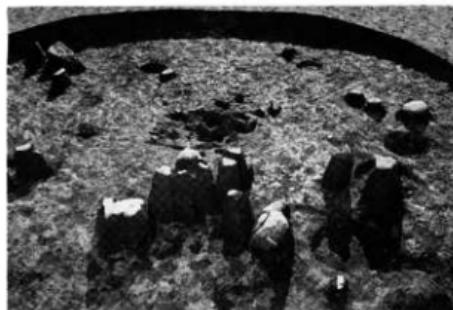
4 第3号住居址遗物出土状况



1 第4号住居址



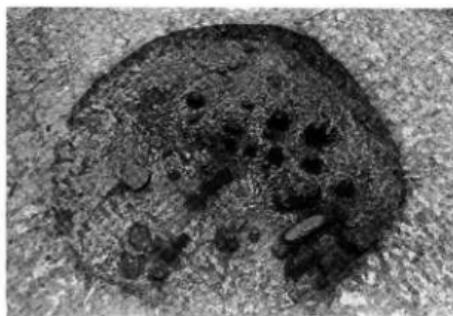
2 第4号住居址遺物出土状況①



3 第4号住居址遺物出土状況②



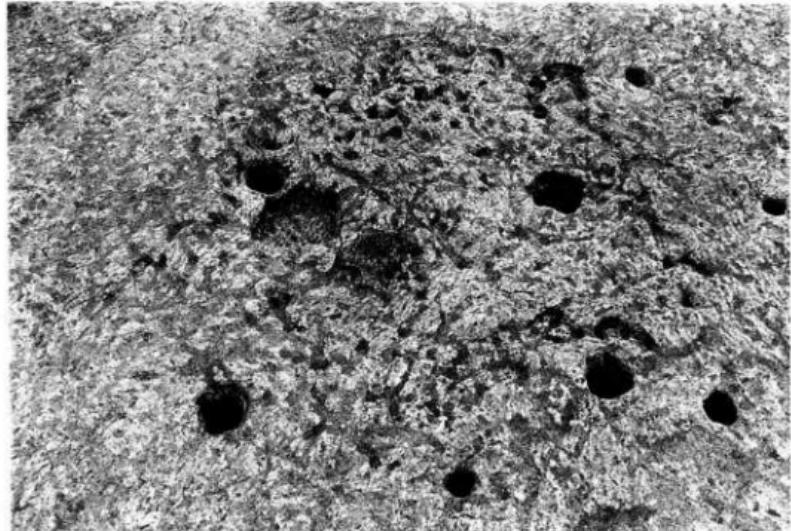
1 第5号住居址



2 第5号住居址遺物出土状況①



3 第5号住居址遺物出土状況②



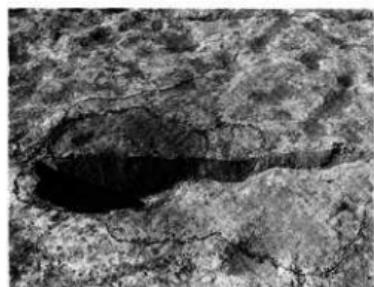
1 第6号住居址



2 第6号住居址土層断面



1 第7号住居址



2 第7号住居址地床炉断面



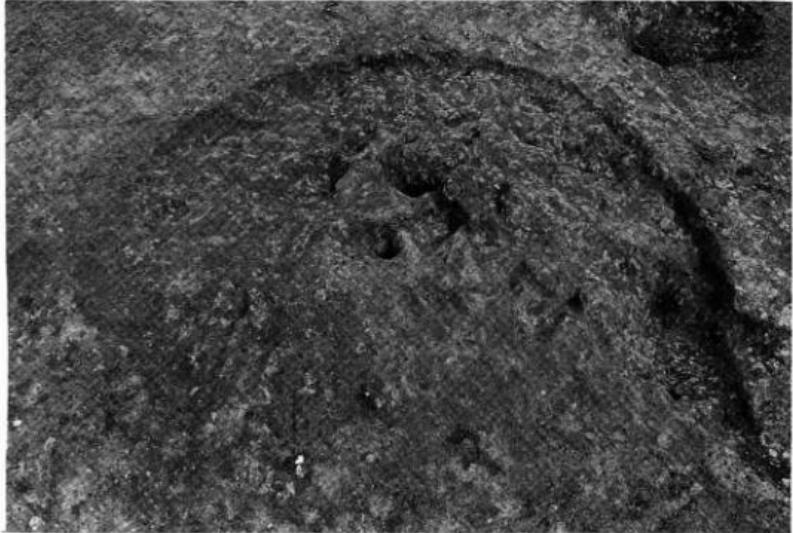
3 第7号住居址土偶出土状况①



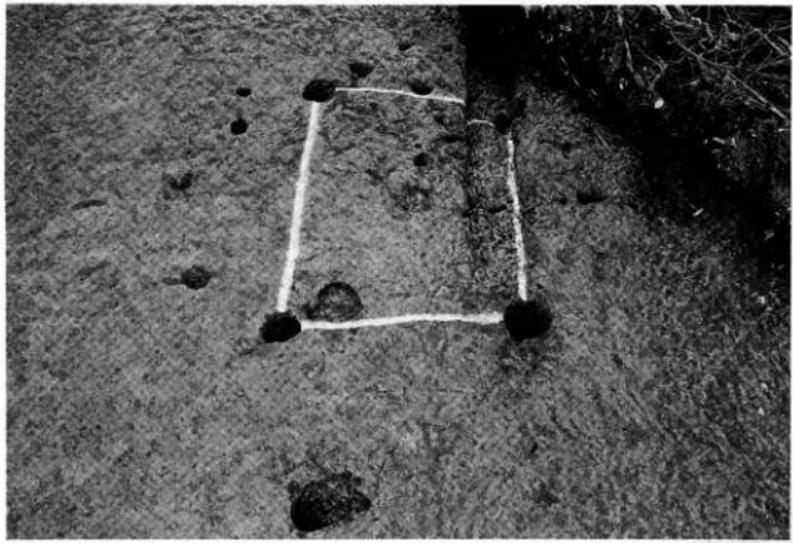
4 第7号住居址土偶出土状况②



5 第7号住居址土偶出土状况③



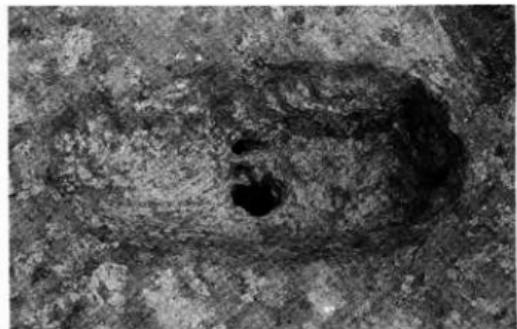
1 第8号住居址



2 第9号住居址



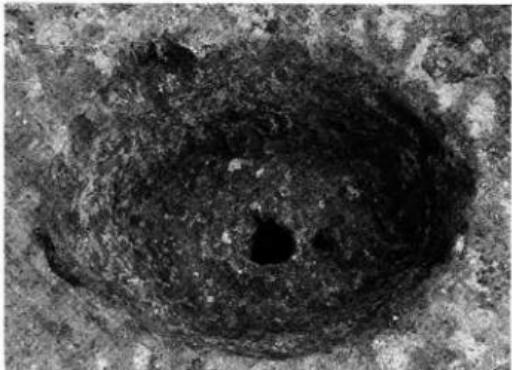
1 台地南側肩部に並ぶ陥し穴群



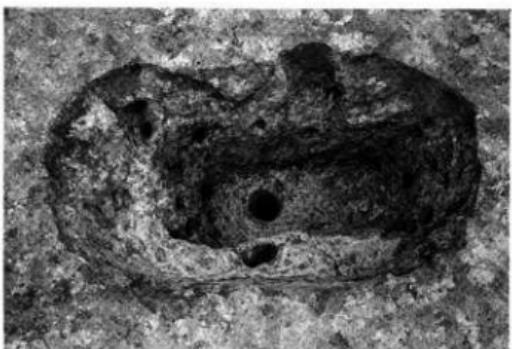
2 第1号土坑



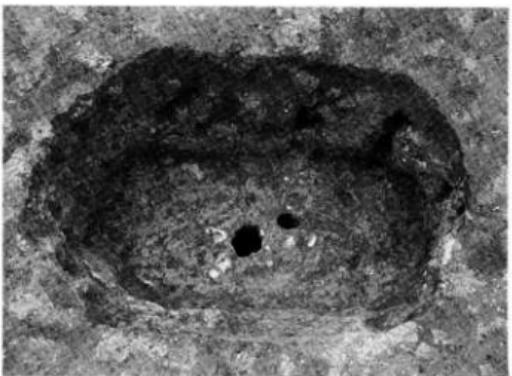
3 第4号土坑



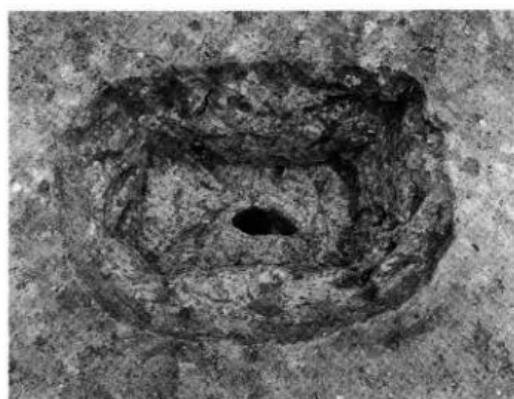
1 第7号土坑



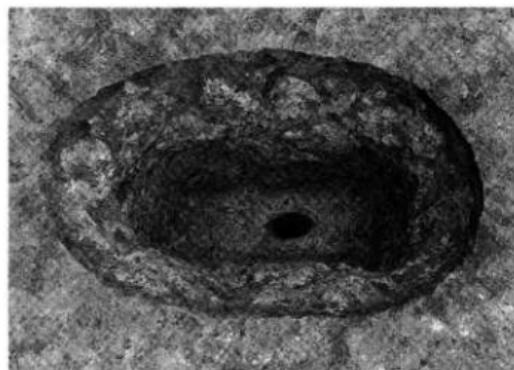
2 第10号土坑



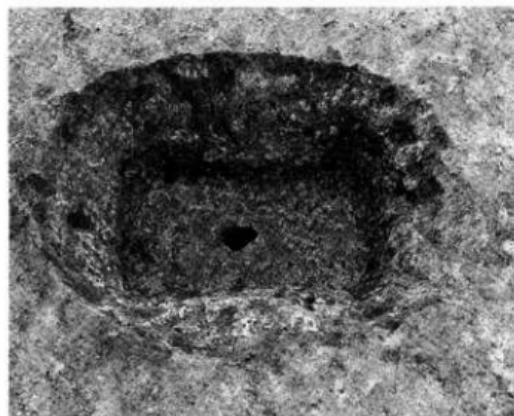
3 第11号土坑



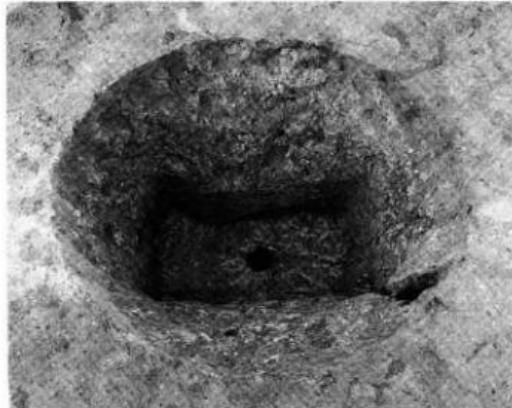
1 第17土坑



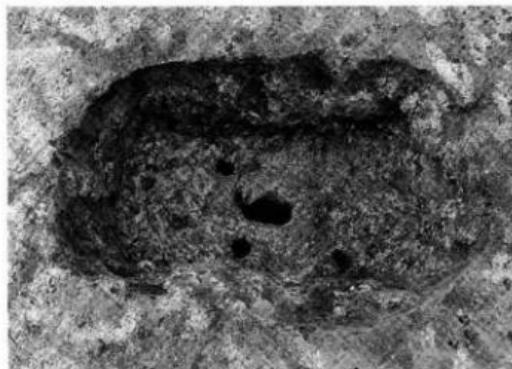
2 第19土坑



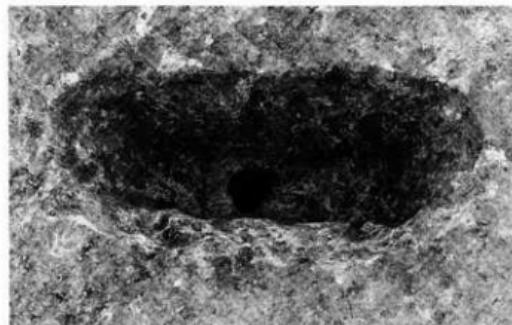
3 第30土坑



1 第50土坑



2 第57土坑



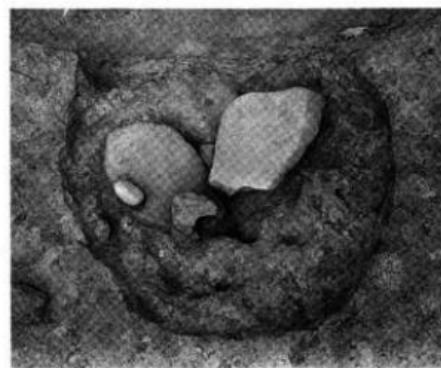
3 第59土坑



1 第65土坑



2 第68土坑



3 第2号土坑

4 第2号土坑石製裝身具出土狀況

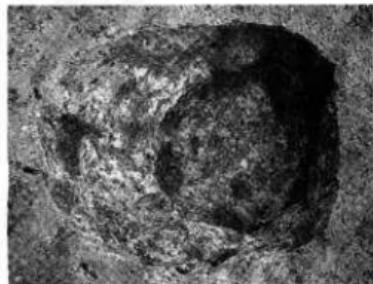




1 第3号土坑



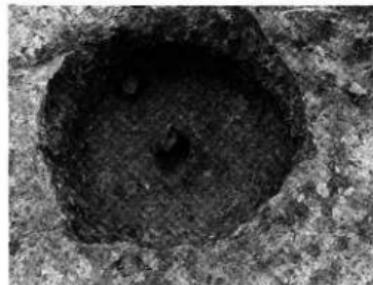
2 第14号土坑



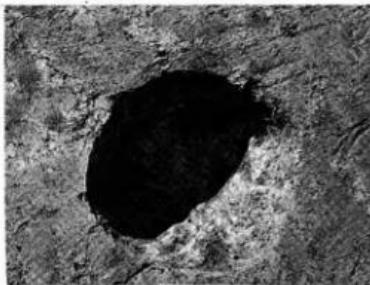
3 第15号土坑



4 第16号土坑



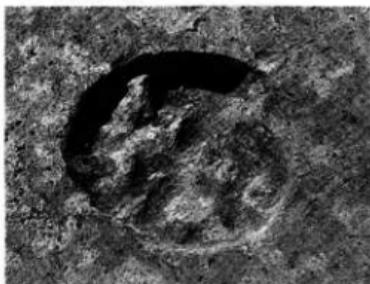
5 第18号土坑



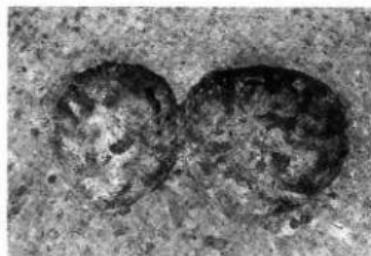
6 第20号土坑



7 第23号土坑



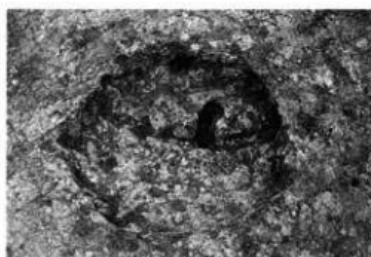
8 第24号土坑



1 第25(右)・26(左)号土坑



2 第29号土坑

3 第40・41・
42号土坑
(右から)

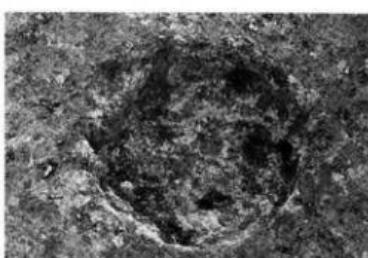
4 第35号土坑



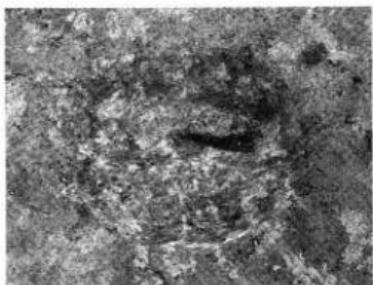
5 第44号土坑



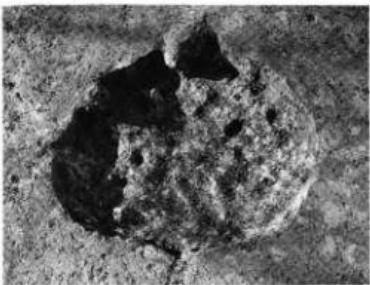
6 第47号土坑



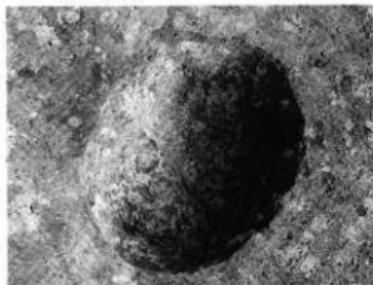
7 第52号土坑



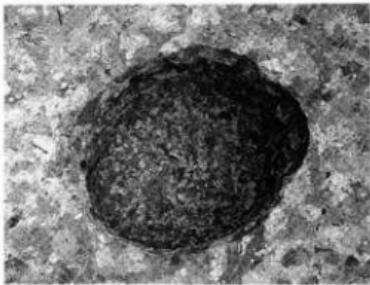
1 第53号土坑



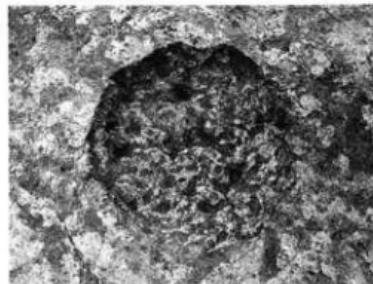
2 第58号土坑



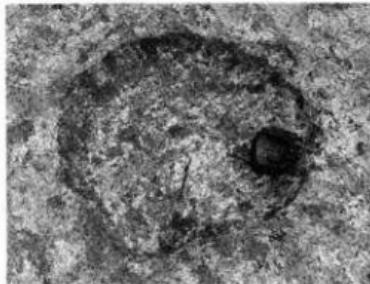
3 第63号土坑



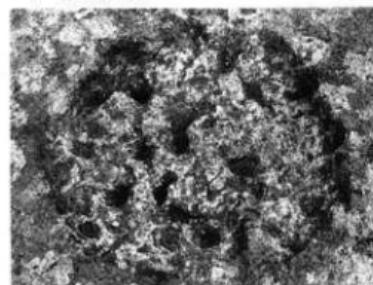
4 第66号土坑



5 第67号土坑



6 第69号土坑



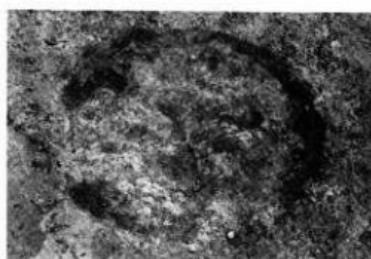
7 第82号土坑



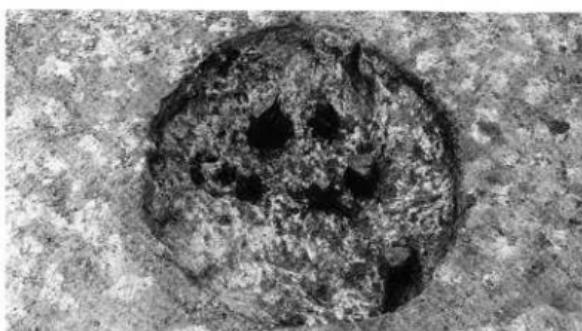
8 第90号土坑



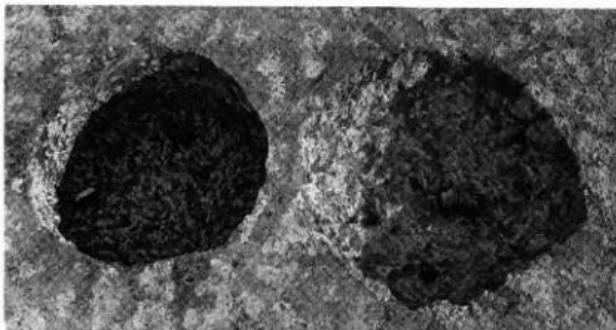
1 第91号土坑



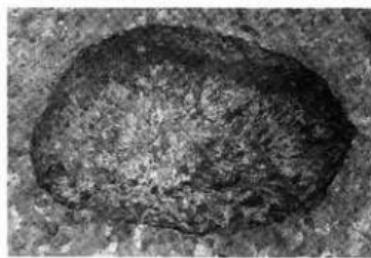
2 第104号土坑



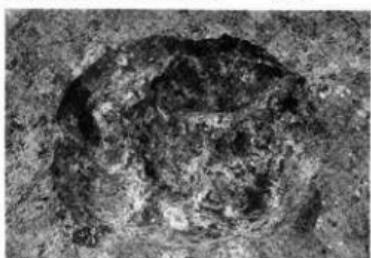
3 第102号土坑



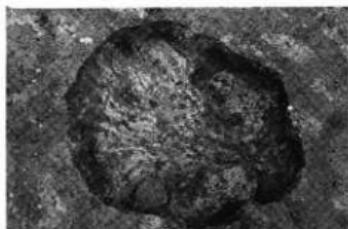
4 第110(左)·
111(右)号
土坑



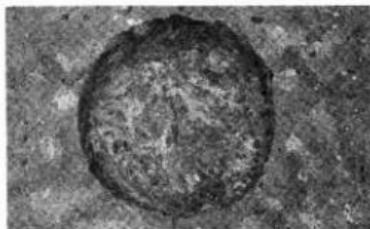
5 第109号土坑



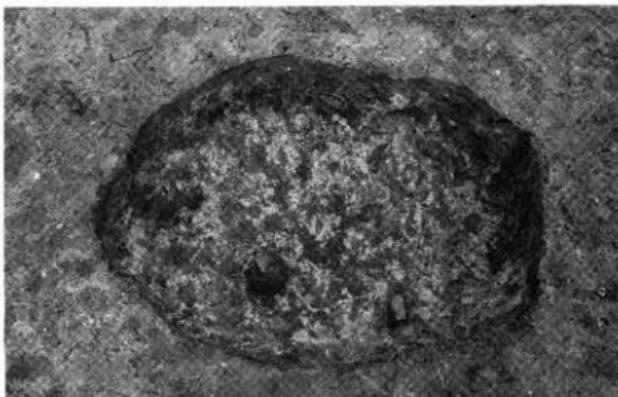
6 第113号土坑



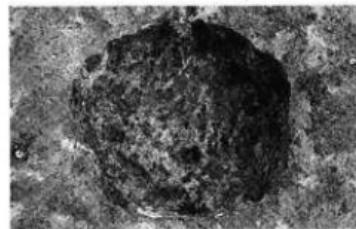
1 第114号土坑



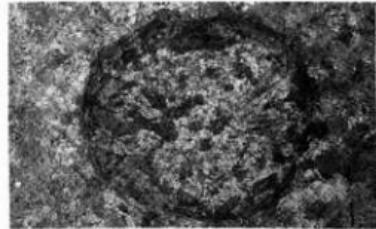
2 第115号土坑



3 第117号土坑



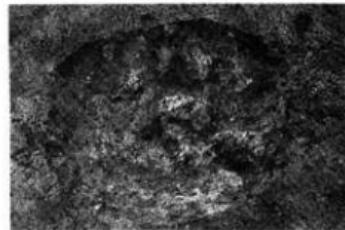
4 第116号土坑



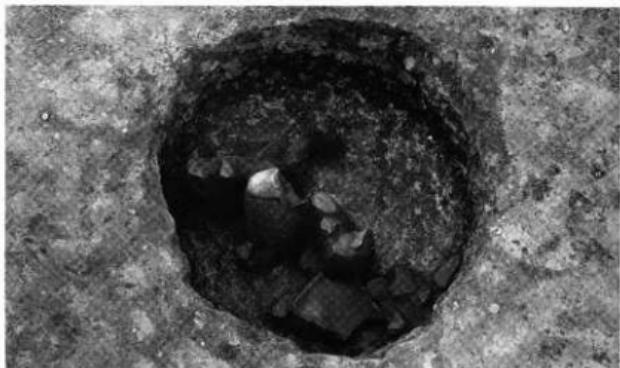
5 第123号土坑



6 第127号土坑



7 第128号土坑



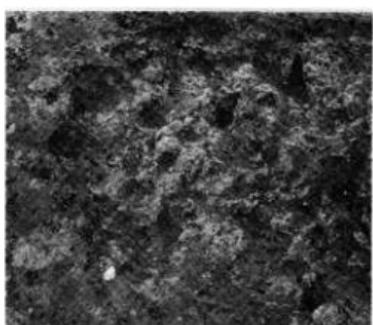
1 第122号土坑
①



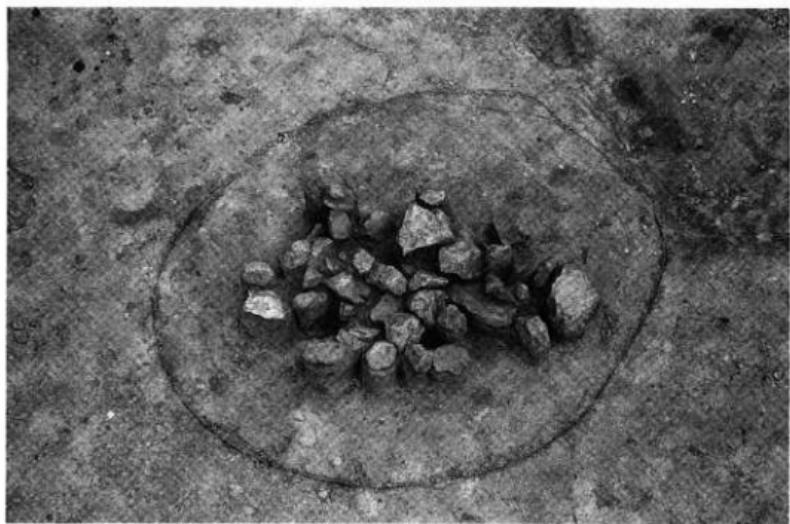
2 第122号土坑
②



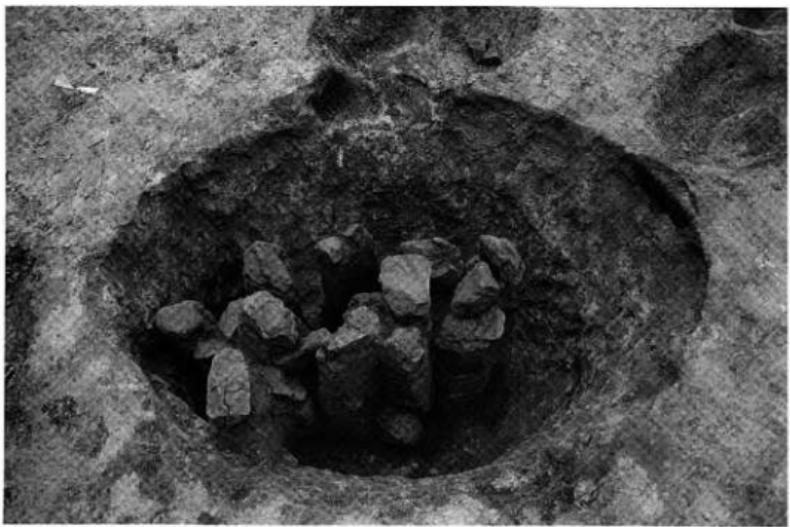
3 第130号土坑



4 第145号土坑



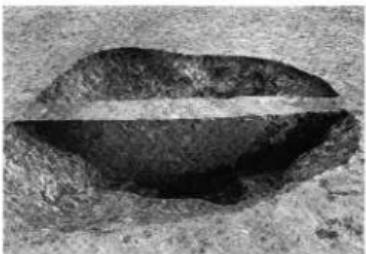
1 第1号集石



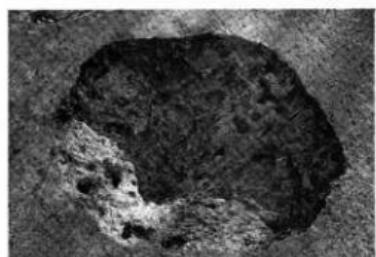
2 第2号集石（7号土坑上面）



1 第1号ロームマウンド



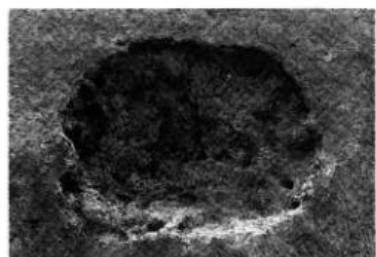
2 第1号ロームマウンド土層断面



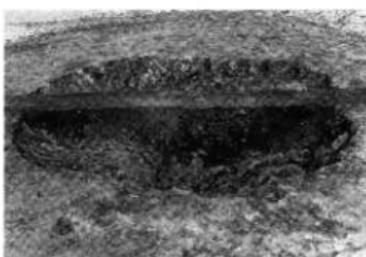
3 第2号ロームマウンド



4 第2号ロームマウンド土層断面



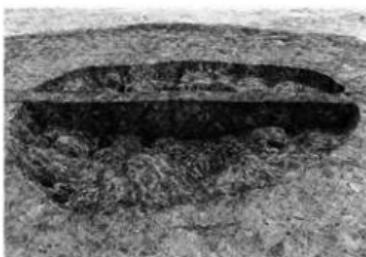
5 第3号ロームマウンド



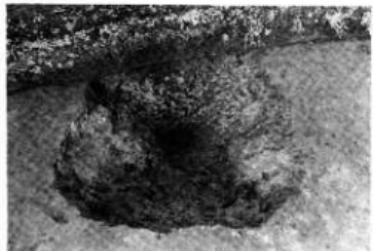
6 第3号ロームマウンド土層断面



7 第4号ロームマウンド



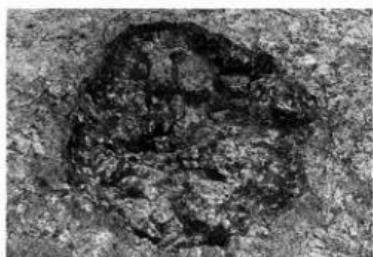
8 第4号ロームマウンド土層断面



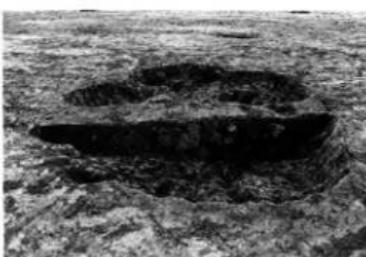
1 第5号ロームマウンド



2 第5号ロームマウンド土層断面



3 第6号ロームマウンド



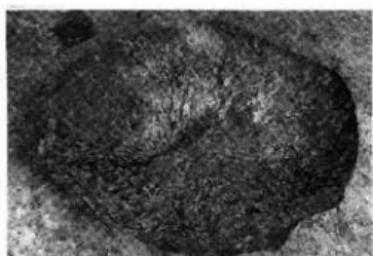
4 第6号ロームマウンド土層断面



5 第7号ロームマウンド



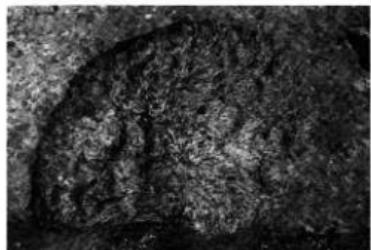
6 第7号ロームマウンド土層断面



7 第8号ロームマウンド



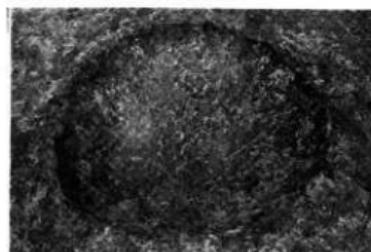
8 第8号ロームマウンド土層断面



1 第9号ロームマウンド



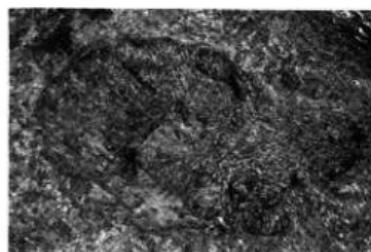
2 第9号ロームマウンド土層断面



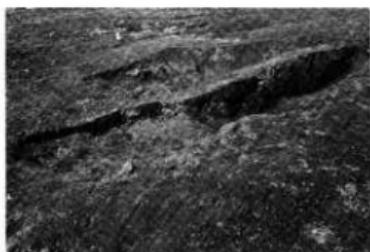
3 第10号ロームマウンド



4 第10号ロームマウンド土層断面



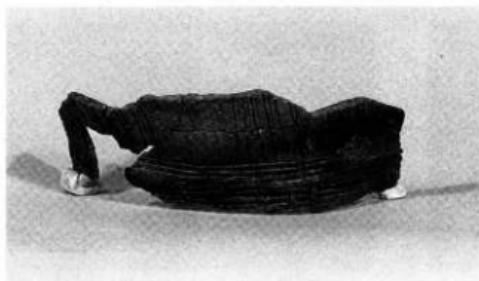
5 第11号ロームマウンド



6 第11号ロームマウンド土層断面



1 第1号住居址炉体土器 1



2 第1号住居址炉体土器 2



3 第2号住居址炉体土器



4 第3号住居址炉体土器



1 第5号住居址出土土器



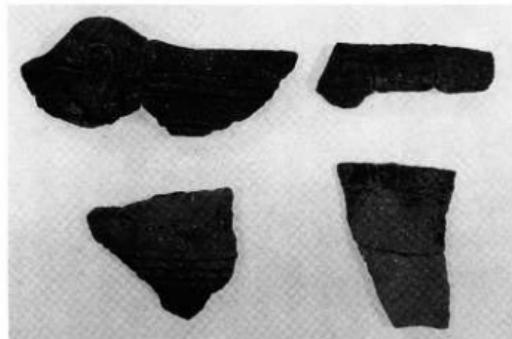
2 第8号住居址炉体土器



3 第69号土坑出土土器



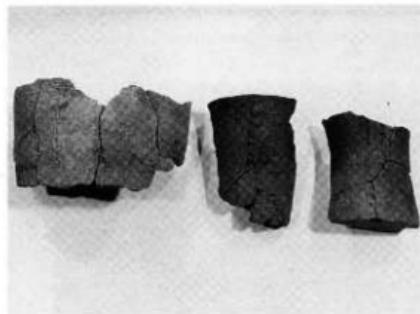
4 第111号土坑出土土器



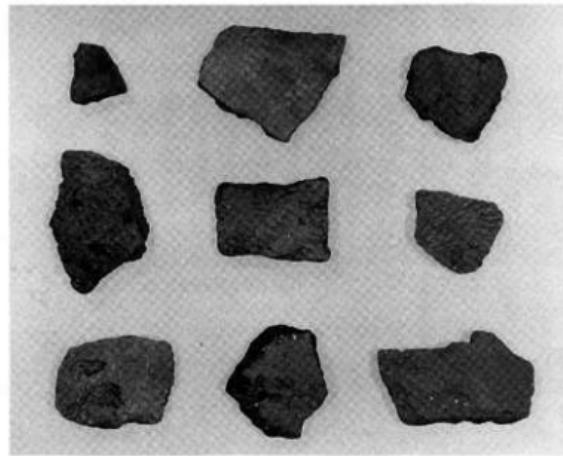
1 第117号土坑出土土器



2 第122号土坑出土土器



3 第122号土坑出土土器



4 表探土器

第7號住居址出土土偶



土偶頭部上面



土偶頭部正面



土偶頭部背面



土偶胸部正面



土偶胸部背面

稗田頭B遺跡

——平成5年度県営圃場整備事業桝木地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書——

平成6年3月10日 印刷

平成6年3月14日 発行

編集 茅野市教育委員会
発行 茅野市教育委員会
長野県茅野市塚原2丁目6番地1号 (0266)72-2101㈹
印刷 はおづき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-5 (0262)44-0235

